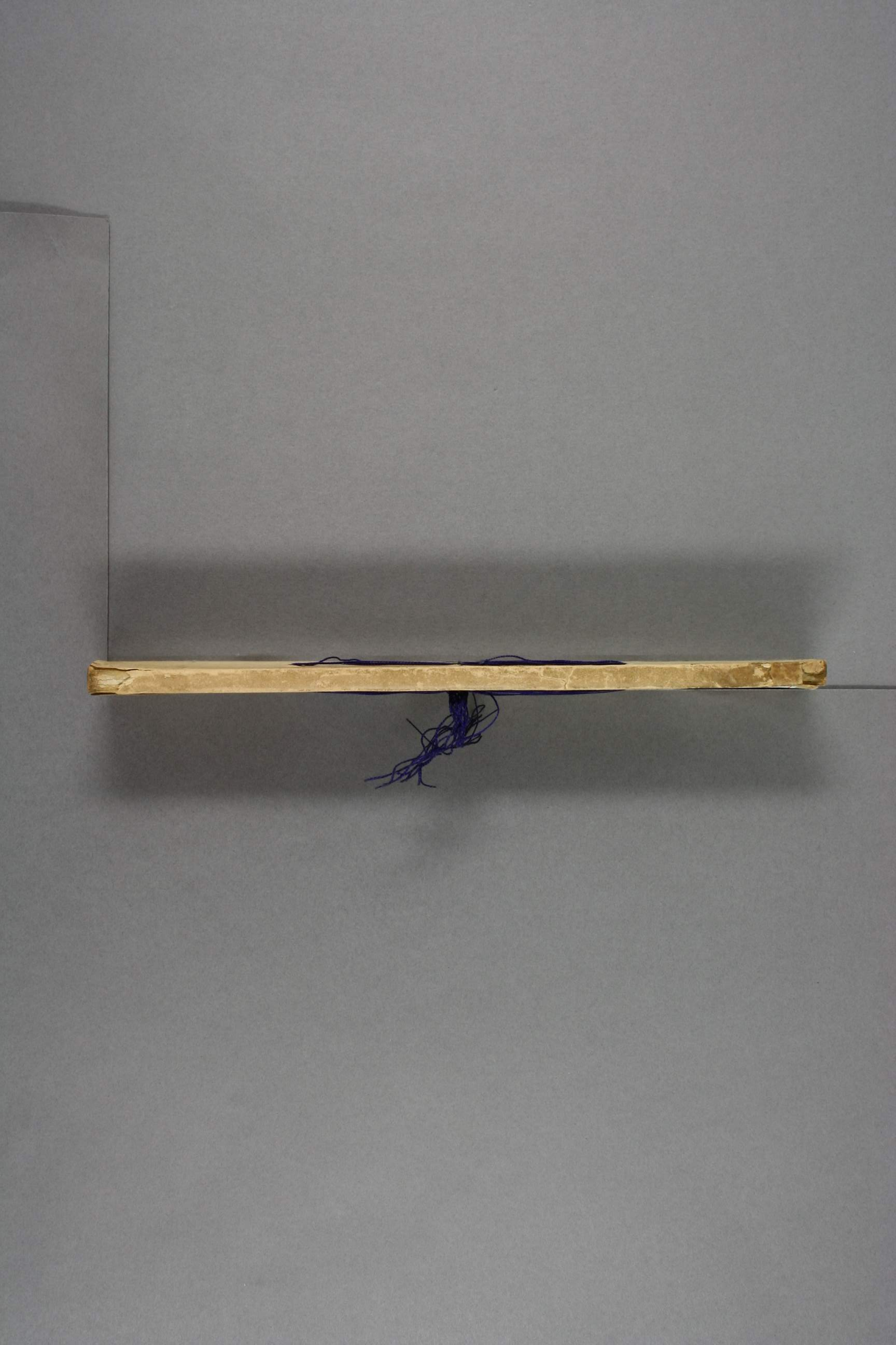
土井晩翠著

# 曉鐘

有千閣
佐藤

本間文庫
文庫 14
D 208



本間文庫

土井晩翠著

# 曉鐘

有千閣
佐藤發行

宗相田小図書

土井晩翠著

# 曉鐘

有千閣
佐藤發行

文庫14
D.208

四十餘年睡夢中
而今醒眼始朦朧
不知日已過亭午
起向高樓撞●●鐘

王陽明

# 曉鐘目次


萬里長城の歌……一
花上の露……一〇
月と水……一二
惆悵吟……一三
夏の夜……一六
暗と眠……一八
秋興八首……一九
岸上の終焉……二五
白桃花……二七
白梅……二八
平和……三〇
弔吉國樟堂……三二




Wenn ich nicht sinnen oder dichten soll,
So ist das Leben mir kein Leben mehr.
—Goethe.

La Muse est faite pour : chanter l'ideal,
aimer l'humanité, croire au progrés,
prier pour l'infini.
—Hugo.

破船……四二
天上……四三
無限……四五
黑龍江上の悲劇……四六
登高賦……五七
朧夜……六四
清怨……六六
夕の妻……六八
富嶽之歌……七一
附錄
汀上の逍遙……八三
深淵……九一
故郷の墳墓……一〇六

# 曉鐘

## 萬里長城の歌

土井晚翠著

（一）

生ける歴史か數ふれば齡は高し二千年
影は萬里の空遠き名も長城の壁の上
落日低く雲淡く關山看す〳〵暮れんとす、
征驂悵み留りて俯仰の遊子身はひとり。

絶域花は稀ながら平蕪の綠今深し、
春乾坤に回りては霞まぬ空も無かりけり、

天地の色は老いずして人間の世は移らふを
歌ふか高く大空に姿は見にぬ夕雲雀。

嗚呼跡ふりぬ人去りぬ歳は流れぬ千載の
昔に返り何の地かかれ秦皇の霸圖を見む。
殘壘破壁聲も無し恨みも暗し夕まぐれ
春朦朧のたゞなかに俯仰の遊子身はひとり。

(二)

三皇五帝あと遠く「六王終りて四海一」
四海の黔首ひれふして雷霆の威に聲もなし、
「わが宮殿を高うせよ」一たび呼べば阿房宮
「わが邊境を固うせよ」二たび呼べば萬里城
春は廬山の花深く秋は上郡の雲暗く。



管絃響き雲に入る舞殿の春の夕まぐれ
袂を擧げて輕く起つ三千の宮女花のごと
花を散して玉殿に浮かす歌扇の風もよし
彫龍の欄奥深く薫ほる蘭麝の香を高み
珠簾を洩るゝ銀燭の光消ぬなで夜や明けむ。

西隅洮の嶺高しおゝ遠東の谿深し、
流を埋め山を截り壘を連ぬる幾千里
かゞりの焰天を燒きつるぎの光霜凝ほり
殺氣夏猶ものすごく守るは猛士二十萬
漢のおなたに胡笳絶にて匈奴の跡ぞ遠ざかる。

(三)

「北夷の憂絶果てゝ境は堅し國安し
先王の書も焚け果てぬ天下の儒者も埋まりぬ

わが萬世の業成りぬ」君王の思しかなりき。

知るや夜半の阿房宮後庭深く森暗く
歌臺の響よそにして獨りあらしのつぶやきを
「浮世の花の一盛り褪むるに早き色見ずや」
聞け長城の秋の營旌旗の暗に消ゆるとき
なたゝく光露帶びて星の縞かにさゝやくを
「富も力も一場の夢覺め果てん後思へ」

（四）

春靜かなる東海の綠を涵す波の上
不死の金闕遠くして童女五百の舟いづち、
絳霞の光天上の花とおしへに匂へども
土に下れば沈濁の示すは獨り世の脆さ、



至尊の榮は高くとも名を玉籍に留め得じ
金人十二鑄りなせどかれに無象のつるぎあり。
心を焦し身を碎くあゝ韓朝の一孤臣
爾の策は成らずとも無常の風はあらかりき、
天地靜かに夜更けて獨り汜橋のかたはとり
流は咽ぶ秋の聲燃ゆる心も靜まりて
思ふやいかに人力の脆きを命の定りを、
鑪椎血無し博浪沙、鮑魚臭有り沙丘臺。

（五）

嗚呼死屍未だ冷にずしてかれ『萬世の業』いづち
暗君嗣ぎて上に在り佞竪の害のなどあらき、
民の怒は火の如く戍卒は叫び兵は起ち
楚人の一炬閃めきて咸陽の宮皆焦土。

霽れざる空に虹懸けし複道の跡今いづれ、
雲あらざるに龍飛べる長橋の影はたいかに、
衰蘭露に悲めば遺宮空しく草の宿
驪山の麓春去れば花さとくく涙あり。

斬蛇のつるぎ炎精の光もさはれ極みあり、
甘泉殿の夜半の月かれも浮雲の恨みあり、
其移り行く世の習ひ二京の花をよそにして
邊土に立てる長城の連雲の影あゝ絶にず。

（六）

邦は亡びて邦に嗣ぎ人は代りて人を追ふ、
鼎は移る朝二十、歳は流るゝ暦二千、
中華幾たび烽舉がり長城の壁越來り
また越去りし國たみの數さへいかに世々の跡。



山川影は替らねど春夢空しく跡も無し、
群雄の覇圖いたづらに殘すは獨り史上の名、
獨り邊土に影絶にす齡重ねて二千歳
殘壘苔に今靑む長城の影尊とし や。

民の膏血世の笑ひ逆政のかたみそれながら
歴史の色に染められし萬里の影ぞなつかしき、
其面影に忍びでゝ泣くは懷古の露のみか、
暮春の恨み誰がために霞も咽ぶ夕まぐれ。

（七）

霞も咽ぶ夕まぐれ遊子俯仰の物思ひ、
北夷禦ぎし長城の昔の跡は替らねど
時世空しく流れては中華の姿あすいかに、
秦漢魏晉移り行く昔の跡を引換て

西のあらしの吹き寄する黄海の波今あらし。

西暦一千九百年東亞のあらしあすいかに、
中華の光り先王の道ゝの民を救ひ得じ、
愛を四海に傳ふべき神人の教いま空語、
看ずや豺狼の慾飽かで「基督教徒」血をすゝり
群羊守る力無く「異教の民」の聲呑むを。

俯仰古今の物思ひ遊子の恨いつ盡きむ、
征驂悵み嘶ける響きを返す壁のもと
思も遠く眺むれば霞たゞよふ大空の
自然の樂も絶果てつ關山暮れて星出でて
恨を含む長城の姿は暗に呑まれ行く。



さらば別れむとゝしへにわが長城の壁のもと
（盡きぬ思は大空の星の光に任かせ置きて）
其星移る千載の時の流の末遠み
替らで影を尙とめむ殘壘にまた忍びでゝ
我世の今日を歌ふべき後の詩人はわれしらず。

嗚呼「永劫の脈搏」はいづれの時か絶果てむ、
人生舊を傷みては千古替らぬ情の歌、
破壁聲無き傍にまた落日の影を帶び
流るゝ光積もり行く三千の昔忍ぶ時
かれ永遠の聲擧げて何の國語に歌ふらむ。

興廢移り悲喜まじる一人の跡一國の跡
笑の蔭に涙あり暗のあなたに光あり

玉樓の花風恨み殘壘のあらし天の樂
嗚呼千載の後の世の詩人よ既に君の歌
今も響けり長城の暗に隱るゝ壁の中。

（明治三十二年春稿）

（註）＊天下の兵器を收めて咸陽に聚め銷して鐘鐻金人十二を爲くる（十八史略）

＊＊張良始皇を博浪沙に狙擊して成らず○始皇巡狩の途沙丘平臺に崩す、群臣秘して喪を發せず一石の鮑魚を以て其臭を亂る（同）

＊＊＊Pulsschlag der Ewigkeit の Liebmann氏の句を直譯す。

## 花上の露

春のたましひ花とよび
曙の精露といふ。

雪より白き花の膚
汚に染まじ露の恩。
玉より清き露のしづく
碎けじ落ちじ花の恩。
春のあけぼの花と露
結べる契り誰が手より。
あゝ花露によりてゑみ
あゝ露花によりて生く。

## 月と水

山の端いづる夕の月
谷間流るゝ夕の水
天と地とは隔たれど
二つかたみにあひしたふ。

影は親しくやぜせども
むつみ語らんすべもなみ
月の恨みに空くもり
水の恨みに瀬はむせぶ。

かくて空なる月の旅
かくて下界の水の旅



いつか望みの影そひて
流れは澄みぬ空晴れぬ。

月は落行く西のそら
水は流るゝ西のうみ
海と空とは隔てねば
月と水との戀なりぬ。

## 惆悵吟

（一）

天女の胸に憑りかゝり
移ろひ果てし花束を
抛ち棄てゝわれ泣くと

見しもはかなの夜半の夢。

覺めても熱きわが涙
拭ひもあへず窓あけて
見れば綠の青葉かげ
落行く月は圓からず。

いみじきものははかなしと
今さらのるか夜半の鐘
音も霞の底深く
引かれて遠きわが思ひ。

（二）

花にあさがれ花に泣く
浮世の春は暮れにけり





霞む月かげ夜半のかげ
八重の櫻の木のもとの
短き夢をいかにせむ
さめずありなばあゝ戀よ。

花散り果てし青葉かげ
今更清し夜半の月
昨日の影を戀ふべしや
今日の光をめつべしや
思に迷ふ人の子に
悟りをたまへあゝ神よ。

## 夏の夜

はやたそがれの影寄せぬ、
風おもむろに吹きかよふ
都大路の夏げしき
洗ひすてたる夕立の
名殘柳に玉とめて。

まばゆく照す電燈の
光はにほふ夜の花、
湯あがり姿逍遥の
すがた幾むれ袖輕く
咽ぶはたかきローズの香。



おほ空高く月いでゝ
八百のちまたの隈もなく
照す涼しき夏の夜や
雲はしづかに收まりて
殘る稀なる星のかげ。

そゞろあるきに夜ふけて
袂は重し露ふかし
月なゝめなる時計臺
ふたつの針の重なりて
うつも高しや時の數。

傾きかゝる天の河
仰ぎて家路さして行く

逍遙の群あともなし
ちまたのあるじ今はたゞ
月の光と吹くかぜと。

## 暗と眠

喘ぎ疲れて西ぞらに弦月遠く沈むあなた
劫初我世に造られし光照らざる森の中
「暗」と「眠」と影ふたつ
かれ氣を吐て人界の愁を夜半におしのおひ
おれ手を擧て煩へる天地を夢に誘ひ行く。





## 秋興八首

一陣吹きぬ秋の風、
雲より送る慘悽の自然の吐息
出河姿を改めて非情も暮の色悵み
清怨堪へず聲を呑む詩人おとゝく涙あり。
誰か彩虹を攀て空高く
淋しき下界の塵の色を
かみ銀漢の流に洗はむ。
嗚呼一歌、われすでに傷みぬ、
天は黃昏を帶ぶ一樣の愁。

「玉露楓樹」も秋の歌
杜陵の詞仙金鐘のしらべは餓を補はじ、

瀛西の空眺めても詩神の寵兒みな愁
桂樹のはなれ綠葉の光は花の色ならじ。
拄げて兒童の師と詫ぶる垂翅は況して不似の分、
さらば滄浪の曲に人の世の窮達のあとを忍ばんか。
嗚呼二歌、われわれを嘆きぬ、
雲は殘陽を蔽ふ惆悵の色。

秋は更け行く青葉山、故園の姿いまいかに、
扶搖のあらし吾を絕て雄圖は夢か五城樓、
桃李の盃の缺けしより三百年の春移り
山川の靈替らぬと偉人の叫また聞かず。
波まの月の影冴もる秋は名に負ふ千松島
汀の寺に誰れか今とはん英主の不死の魂。
嗚呼三歌、われ鄕を忍びぬ、



菊は荒園にはふ瀼々の露。

扶桑の帝土千載の詩運は毎にうすかりき、
桂はな咲く西の空薫り比へんすべもなみ
さらでも脆き文の華今また秋に逢へるかな。
流水遠く春去りて谷に芝蘭の花碎け、
逸韻空にむなしくて九皐の鶴、聲も無し。
月はすみだの秋の汐、岸べのいほりいつまでか
蟄龍の怠りに風雲の氣の潛めるや。
嗚呼四歌、われ文を愁へぬ、
風は澹端を掃ふ落葉の聲。

海若驕る秋九月、
浩々の水眺むれば思は遂に窮まらず。

波のあなたの邦いかに、
邦の眺めの數いくつ、
花は掩はん詩聖千古の墓
月は照さん雄都七丘の墟。
歴史の染むる長江の流は廻る肥沃の土、
氷河を下す萬仞の峯は日に照る夏の雪、
空しく夢に入り去りて今年の秋も更けにけり。
嗚呼五歌われ西をしたひぬ、
烟は波上に横たふ長汀の夕。

帝都の春に負き去りし友は山川今幾重、
夢も迷はん邊城の搖落の秋、歌ありや、
やめと世を泣く慷慨の涙は酒と化しもせじ、
一飽足らば昭代の民とも笑へ肱まくら。



白露に咽ぶ寒蟬のわれもねになく夕まぐれ
たゞ一片の雲の色に遠く千里の思を寄せん。
嗚呼六歌、われ友を惜みぬ、
影は遙空に迷ふ雁字の群。

一輪の明月に二千里外も暗からじ、
高樓簾を捲き去りて捲き去りて
關山のあなた異郷の空を思はゞや。
三十六の峯青き舊都の夏の夕まぐれ
一葉の舟嵐峽の綠の流、水澄みて
情は傷みぬ千載風月の色
文は論じぬ一代才人の筆、
歡會夢は長からで秋はそゞろに更けてけり。
嗚呼七歌、われむかしを戀ひぬ、

露は松篁に滿つ銀蟾の影。

輪影西に傾きて九天の露聲も無し、
人間わが世明月の光は常に圓からず、
三千の素娥、瑤臺の舞曲は誰か耳にせむ。
下界の絃歌いみじきはたゞ愁絶のしらべとか、
千載何の處にか理想は實に返るべき。
清夜の一歌たゞしばし秋のかほりを身にしめて
廣寒殿の風のねに蒼茫の思託さばや。
嗚呼八歌われ曲を了へぬ、
月は星河を渡る五更の曉。

（明治卅二年秋稿）

※「只把春風桃李色」仙臺藩祖の句、公の蹟は松島の瑞巌寺にあり。



## 岸上の終焉

白布のとばり拂はせて
涙ににじむ目に見やる
夕海原はしつかなり、
ひとつ東の暮の星
そはたましひの行くさとか。

檜の松風さよなかに
叫ぶ恨みはたがためぞ
ともしび暗し無象の世
見るかいまはの彼が目は
魂は半ばは過ぎ行きて。

あかつき清き八重の汐
沖路はるかに誘ふ風
雲を拂へばさしのぼる
朝日の影ぞまどかなる
途を迎ふや逝く魂の。

やがて黄金の波湧きて
すなどりの歌いさましく
四方に漕ぎづる白帆舟
其舟遠し波のあなた
其魂遠し星のあなた。





## 白桃花

朝日影そふ淺みどり
谷間を過ぎて聲高く
清く流るゝ春の水、
みなもに戀と思ひを
春もろ共に浮べさりて
白桃の花いづち行く。

消ねせぬ雪の色みせて
羊ひとむれ草飼へる
流に添へるみどりの野、
なひるの空に夢みたる
牧の子笛を捨てて位きて

白桃の花去るを見き。

百の柴舟しらほ舟
ふむる紅夕霞
廣き流のかた岸に
緑暮れもく青柳
柳のもとに流れよりて
白桃の花また去らじ。

## 白梅

曰はず語らぬ物思ひ
梅が香ともに袖にして
つらき定めを恨み詫び





たゞ行末の遠きたのみ
契りて二人別れけん
春やむかしの臘夜に
月は夢より淡かりき。

たとへば廣き空の中
彗星の友道ふたつ
廻りあひては別れじと
契るもしばし夢のまや。
ふたつおの〳〵其旅に
心ともなく引れ行く
定離そらにもなからずや。

別れし跡のつれなくて

はやもひと歳廻りきし
春やみやおの春ならず、
袖につゝめる梅が香の
おゝに匂へばおゝに照る
花と月との影うつゝ
あゝその人は夢にして。

## 平和

海に黄金の波を湧かし
空に焔の雲を染めて
しつかに落ち行く夕日の姿、
見よあめつちの胸の中
おほいなるものの彼にあり。

海にうつむく影をてらし
空にいみじき香を吐きて
岩かげにたつさもりの姿、
見よあめつちの胸のうち
うるはしきもの此にあり。

おほいなるものの光を射り
うるはしきもの色を染めて
夕にみつる愛と平和、
花は落ち行く日を慕ひ
日はたゞすむ花を戀ふ。

# 弔吉國樟堂

## 一

玉葦花を積みのせて霞に沈む春の神、
別れを遠く欄に憑り流にのぞみ見送れば
空も銷魂の色深き五城樓下の夕まぐれ、
碧樹碎けて鶴去りて白玉樓に君ありと
都のたより一封の涙の痕は夢ならず。

嗚呼白日の飛び行くを誰かは空に留め得ん、
夢を抱て流水の光を慕ふ香をはやみ
散りてはかなき人生の花の行ゑや今いづこ、
緑は烟ふる一望の柳眠りて聲もなし、
雨を含める夕ぐれの雲も有情の色にして。





青山花を葬りて夕の森に月黑し、
無心の調か牧童の姿は見にぬ笛の音、
暮天の暗に包まるゝ愁の耳に聞きとれば
萬古盡きせぬ人の世の恨を述ぶる靈の歌
闇浮のよそのの泉より思を汲むに似たりけり。

## 二

昨日は齡二十六、けふは永劫の曆に入る、
芳蘭の花脆うして運命の神ねたみあり
一瞬の前君ありき、一瞬の後君あらず、

四歳都の假やどり契りし道は淺からず、
斯文の光仰ぎ見るひとつの窓の影ふたつ
其影ふたつ人の世に今百年の別れとや。

夕日いろどる不忍の池の汀のさゞれ波
岸の道遙袖かろく手を携へし日もむかし
隅田の堤夕ぐれの朧の月も散る花も。

思いためる雪の暮正月京をたちいでつ
忍ぶが岡のあけぼのをまたも共にと契りけん
名殘の聲は春かせに今もひゞけど人あらず。

昨日は山河九十餘里、今は生死の關幾重、
月の光の名にしおふ千松島かげ波のへに
夏を忘れて歌はんと契りし人はいつぞや。

三

都を思ふ今更に母校の春の夕げしき、

朱門の垣は深綠楊柳のかげ暗からむ、
もふべ花咲く電燈の光まばゆき玻璃の窓
千百の卷集めきて探れる世々のあとかたや、
それはた空し學の海さきのあらしを傷みきを。

あゝあゝ細く光ある雙眸の星消落ちて
かたみと殘る一塊の灰のみ鄕に今歸る
火輪大地を馳けり行く東海の驛五十三、
生時のむかし仰ぎ見し企望のかげの富士の嶺
今は愁の雲閉ぢて神秘の色や深からむ。

薩摩潟波のあなた、夏や來ぬらし古城の夕、
新なるその墓、あらたなるその綠、
やがて照らん春を忍ぶ半輪弦月の光、

やがて聞かん血に叫ぶ千聲杜鵑の恨、
おれより南樓夢常に短からむ、
おれより西海波とおしへに咽ばむ。

かくて三尺の塚ひとつ（恨や凝りて石と立つ）
悽冷の面とゞむるはたゞ薄命の夢のあと、
是より日々に深み行く苔の綠に花も無く
泉臺暗くとおしへの夜にむくろはしづみ行く、
土にむくろは歸り行く――魂の行くゑはいつおぞや。

## 四

およひ淋しき雨のおとに愁は花の上ならず、
天地の染むる暗の幕におもるは人の世々の思ひ。
名も日ぐらしの里のもふべ烟と消にしかたみの雲
去ぐれておゝに我宿に花を碎ける雨と降るか。
のきばのしづく夜半の窓に無韻のおとば何の恨み
ともしびなれも心ありて忍ぶか過ぎし人のなおり。
去づくの音の絶もるとき更に「靜寂」の語る思ひ、
ともしの光消もるのち更にさゝやぐ「暗」の言葉。

## 五

油は盡きぬ、ぬばたまの暗のおろもに纏はれて
花しぼみ行く床の間のあやなき蠹り身にしめつ、
聞くは友呼ぶしめやかの遠き蛙の夜半の歌、
流轉（るてん）の聲と姿とに波咽び行く廣瀨河。
乾坤盡きじ永劫の神秘のといき又おゝに

名殘の春を逐ひやりて愁ふ一陣夜半の風、
夢さそさわげ昨日まで色はにほひし花の窓
その窓押せば暗深く今や「無限」の影ひとつ。

萬古の光動きなき北斗さよひは見にわかず、
珠貫貝聯天狼の影やいつさの空のはて、
くしき力の蒔くとさろかなたに靈の邦ありや
そさに不盡の春ゑみて石さとぐく歌ありや、

さゝに愁の花咲きて涙の谷に霧暗し、
さゝに移ろふ春の世に契短き塵ふたつ、
ひとつ跡なく消に失せて秘密のかゞをくゞり行き、
ひとつ名殘の夢さめて永き思に沈み行く、

六



思よはじまる何の郷、愁よ終る何の邦、
銀河のよそか星のよそか、空の海やむ雲のよそか。

千萬の生、千萬の死、無限の起り、無限の亡び、
かくて流星の影も消にぬ、かくて三春の花も枯れぬ。

黄金の色見るめ眩む夕の雲もかくは褪めぬ、
白銀の光霜さほる夜半の月もかくは落ちぬ。

七

幽淵暗し億劫の生を呑み去るそはなれか
死よ青白く電光の雲間かすかに馳けるさと
塵界のおもに閃めきて無常をしめすなが姿、
哲學光薄くしてその神秘を穿ち得ず、
宗教迷多くしてその眞相を悟り得ず、

紅雲褪めて塔臺の曲はわが世の風と荒れ
彩虹斷にて天上の春は下界の花と散り、
劫灰絶にず吹き拂ふ世々のあらしに人の子は
たゞ力無く眼を擧げて天のあなたを夢むるよ。

愁よもだせ百年の齡短し人の春、
嘆よ眠れ煩惱の力かよはし墓の淵、
穹窿高く黄金の光を凝らす神の子の
またゝく眼に閉ぢおもる不言の教讀めずとも、
喜べるもの笑めるもの傷つけるもの泣けるもの
すべての上に下り來る平和のめぐみあゝ思へ、
あらしよ、雲よ、散る花を誘ふて遠く行く水よ、
行て大空暗の中に、去りて大海波の底に
倦みし、疲れし、困みし我世の夢の旅終へよ。



嗚呼夢深き人の子の悟に遠き空のあなた、
有象の世界幾萬の群を包める空のあなた、
誰かは拒む想像のするどき羽も猶たもき、
幽玄微妙圓滿の高き無象の邦無しと、
天の光を閉ぢかくすわだなる人の屋を出でよ、
靈の光を蓋ひ去る僧と俗との聲捨てよ、
人籟斷にて暗深き夜半の空に佇めば
天地しづかに靈籟の無絃の琴をかなでいで
人の心の底深く聲は囁ぐ「たゞ信」と。

（明治三十三年暮春稿）

※彼が大學院に於ける專攻の學科は歴史なりき。
※※昨年彼が同郷の秀才某史學を修めしものまた幽冥の客となりき。

## 破船

半輪の月斜めなり、
地平線上雲黑く
形さながら世を笑ふ
惡魔の影に似たるかな、
破船のへりを洗ひさりて
波はむなしく立ちかへる。

波また寄せてまた洗ふ
折れし檣やれし舟
語るは何の悲劇ぞや、
叫喚の名殘たゞわらし、
月はすざまし去かばねの
殘れる數に青白う。
自然の力、波の力
引きてしづめて海底に
ふたつの影を呑まんまで
しばしは命か猶殘る
あゝ破船の姿波のさなた
あゝ半輪の月波のわなた。

## 天与

光のおほ海、色のおほうみ、
千百萬の日を集めて
熔すにたる波のかたはら

神人碧玉の板とりて
焔の筆に鑄るは日記か。

『あした――星雲やゝさめぬ、
太陽の光てりましぬ、
地球の泡生れいでぬ、
樂園の花さきそめぬ。

『もふべ――星雲なほさめぬ、
太陽の光衰へぬ、
樂園の花うつろひぬ、
地球の泡は碎けぬ』と。

天上高し日ひと日





下界幾億の歳か劫か。

## 無限

あらしの鞭に花泣きて
胡蝶の夢もさめはてつ
春のひかりはうつろへど

仰げば理想の空、高く
「無限」は照りぬはゝゑみぬ。

人のつぼみのおさなおの
いまはの床に母は泣く
家の光は消に行けど

仰げば理想の空、高く
「無限」は照りぬほゝゑみぬ。
尊き道の名によりて
罪なき血汐すゝられつ
教のひかりくもれども
仰げば理想の空、高く
「無限」は照りぬほゝゑみぬ。

## 黑龍江上の悲劇

一

大江流れて四千露里、水は長空の影ひろく、
雲烟迷ふシベリヤの南を遠く貫きて、
末曦靄の海に入る黑龍の流、萬古の波、
記せよ――西暦一千九百年なんぢの水は墓なりき、
五千の生命罪なくてゝゝに幽冥の鬼となりぬ、
其悽慘の恨みよりゝの岸永く花なけむ、
千載ゝれより大江の名、罪の紀念に伴はむ、
萬世ゝれより大江の線、東亞の地圖に血を染めむ。
犧牲は平和の清の民、賊は兇暴のコサック兵、
その豺狼を狂はして群羊をかりしものやたゞ、
『露軍の中將グリプスキィ』怒の波に名をのせて
四千里遠く大江の水よ四海に奔り行け。

あゝなんぢ、殘虐の將、虎狼の兵、
千秋何の處にかよそになんぢの類を見ん、
上帝の怒盡くるまで、大江の流枯るゝまで
その罪惡をとおしへに萬邦の民よ皆詛へ。

皇天の光亡びずば『歷史』よなんぢの責思へ、
嗚呼鋼鐵の筆とりて正義の女神永劫の
おもてに既に記せるを君戰慄の目に見ずや、
『西曆一千九百年黑龍の水血なりき』と。

二

あゝわまがける『想像』の無象の翼身に借りて
恨も長き黑龍の岸の其日の樣を見よ、
煙塵空を暗うして一隊の虎狼かけりきぬ、
大江の音よどむまで見よ號哭を天にあげ





老幼男女いましめの繩に驅らるゝ數五千。
同胞五千いくとせかおゝの異鄉のかりすまゐ、
錦文もうべ窓に入る故園干戈のおとづれに
思いためる夜半の夢、あけぼのちかくおぞろけば
翼ならして荒鷲はやさしき鳩の巢におちぬ、
牙を揮うて豺狼は羊の檻に襲ひきぬ。

六軍の王師賊なりき、軍旗のほまれいづれぞや
掠奪つきて驅られ來し清人五千途いかに、
大江の水、天ひたすおゝ黑龍の岸のうへ、
まなお焰に燃にひかる虎狼ひとしく吠に立てぬ、
『平和を破る清の民、とく江を越に鄉に行け』。

群鴉亂れて雲に入る翼はあはれ彼もたじ、
舟やいつさ、橋やいつさ、清人泣きて訴へぬ、
『順良の商估清の民、いかで平和の敵ならむ、
流は墳墓、大江の逆捲く波を君見ずや』
虎狼涙に和がじ、露人の答たゞ砲火。

いかづち落ちぬ、白日の光は暗と消に失せぬ、
天の萬象さと〳〵く怒のあらし吹きさりぬ、
雨か彈丸の空飛ぶは、夜か硝煙のうづまくは、
伏屍は岸に山を積み、溺死は江に水せきて、
聞け、號哭と叫喚と、天地は今か修羅のちまた。

思愛の父子手を取りて奔流の波にさらはれつ、
新婚の夫妻抱きあひて虎狼の兵に屠られつ、



泡の大水に消もるさと粗のあらしに散るがおと、
燕の猛火に燒くるさと、蠟の焰に熔くるおと、
『正義』よ悼め罪なくて逝けり平和の民五千。

三

江流逝きて波暗し、浮べるかばね今いつさ、
去れよ四千里わだつみの底は露人の影なきに、
去れよ長鯨汐を吹くあらびは彼にまさらじを。

岸のしかばね青白く鉛に似るを誰か見る、
齒をくひしばり虚を握み砂泥にまみれ血に汚がれ
天を仰ぎて倒れ臥す慘憺の姿たれか見る。

綾羅ひとたび紅の花を包みし袖いかに、
銀鬚きのふは幼子のゑみを迎へしおもいづれ、

無垢はさながら白蘭の蕾に似れる魂いつあ。

其さま見じと『夕ぐれ』はおもてを掩ふて過ぎさりぬ、
『夜』よ、あらしに吹かれきて暗のあろもに彼を蓋へ、
陰火亂れて啾々の魂は恨に堪へざるを。

千秋ほかに比なき悲劇のあとはかくなりき、
いざや陰府の火を逃れ血汐の壺を傾けて、
サタンよ祝せ、人の世になんぢのよさし尙盡きず。

**四**

萬馬のひづめ飛びちかふ兵戈のあらびいくたびぞ、
教徒の怒り血に燃にて倒れし犧牲いくばくぞ、
さはれ千歲何の時(歷史は知るや、われしらず)
神を崇むる大帝の六軍の師故なくて



羊に似たる外邦の五千の民を屠れりや。

見よ幻を天の中、銀鬚かゞやく一巨人、
無限の光胸にあり、鮮血のあと足にあり、
『われ東西の文明の光を一にあはしてき、
露人の罪にわが最期あゝかくまでに汚れぬ』と、
『たそやなんぢは』彼答ふ『十九世紀の靈を見よ』と。

玉殿のよる靜かにて星斗まぶたの重きとき、
錦繡のとばり暗うして香のかすかにくゆるとき、
高塔の鐘しづまりて侍衛の夢の深きとき、
東亞の領のおとづれに寶冠ひとつひれふして
その民のため國のため罪を萬軍の主に謝せよ。

**五**

嗚呼五千の靈、清人とかれ生れしや何の罪、
彼牛羊に劣りしや、彼禽獸に類せしや、
覆載の恩、故ありて造物彼に拒みしや、
さきは一さび無知の暗、頑冥の夢さめやらず、
血を宣教の二師に染め罪に一州の地を替へき、
いま朝政のかげもなき國歩のなやみ時の不利、
『同胞五千罪なくて異鄉の暗に魂泣く』と
率土いづれの處にか彼はた寃を訴へん、
嗚呼北極よ、南極よ、萬邦の民の良心よ、
基督教の道德よ、十九世紀の文明よ、
語れ――皇天の正義今無きや。

六

世界の義人聲なきや、爾の耳は聾ひたりや、
基督教徒たゝざるや、四海同胞の訓いつくぞや、





普天の詩人鋼鐵の一絃すでに絕にたりや、
かれバトモスに現はれし幻今は跡なきや、
さきにシオンに照りいでし光は暗に沈めりや。

人種のはだの白か黃か、差は愛憐の妨か、
神にふたつの道ありや、愛にふたつの別ありや、
『愛の敎の一の民罪なきわれの血を流し、
愛の敎のほかの民皆そのわざをよしとしぬ』
異敎の民の訴をわれ願くは聞かざらむ。

その悽愴の訴を無情の耳にきかむ前、
震へる魂よ、ひれふして高き至聖の名を思へ、
時は遙けしいにしへに返る一千九百年、
橄欖山の暗にあらしも泣けるゲッセマ子

夜半の

そゝに憂の盃うけて祈りし影をあゝ思へ。

七

嗚呼事終り罪なりぬ、千秋の悲劇かく過ぎぬ、
なんぢ無象の羽かろき黑龍江の岸の風、
九天のあなたセラヒムの萬軍の列かきわけて
咽ぶ銀河の波と共に永く露人の罪鳴らせ、
なんぢ滄溟の水に入る黑龍江の波の音、
五千のかばね葬りし流の響たにずして
四海の濱にとゝしへに高く清人の寃を呼べ、
七星北斗十二宮、夜半の光滅びずば
神人共に憤るゝの兇戾を忘れざれ、
寃を憐む百世の義人、なんぢに聲あらば、
東亞の圖上大江の線を血汐に染めていへ
『西暦一千九百年、黑龍の波かゝりき』と。



（註）頃者客の露領ブラゴエチエンスク府より歸り來るあり、就て同市悲劇の眞相を問ふ、客慨然として語りて曰く同市附近一帶の岸は清人の屍黑々として惡臭鼻を衝き啾々の鬼氣人を襲ひ慘憺としてうたゝ行人の腸を斷たしむ、八月二十日余等一行の武市に着してより滯留殆んど十餘日、其間アイグンの爐煙は遠く天に連りて尙未た止まず、一脈の黑煙は濛々として遙かに大市邑の昔を想見せしむ、露曆六月一二の兩日清兵武市を砲擊したりと稱する跡に就て之を見るに僅に或民家の一端を損じたるに過ぎずして露人當時の騷擾却て怪訝にたへず、軍務知事グリブスキイ中將は武市淸人の內應を慮り、同四日一隊の守備兵を全街に出して淸人を捕縛せしめ五千餘人の老若男女を狩りて黑龍沿岸に送り砲火と江流とを以て悉く之を爐せり、武市の淸人五千、內潛伏遁竄命を全うせしもの僅に五六十人に過ぎず（九月十九日東京朝日新聞、同廿一日ヤパン、タイムス等參照）

## 登高賦

玉露しづかに空を洗うて乾坤おゝにまた秋を見る

歳は明治の三十三、西暦まさに千九百年、
大虚のおもて永劫のうへ人界の爭あゝ未だ終へじを。

さもあらばあれ萬古の眞、自然の色は長に澄めり、
天地蕭森の氣を湛へて山川遠く畫圖を披く
五城樓外西丘の夕、思ひは縹緲の空に入る。

江山そゞろに秋の思、その秋の精、秋の風、
吹くか星斗の震ひ動きて靈の如くに消もる空より、
大虚の呼吸清く遠く空に搖曳の雲を拂うて。

星雲の影凝らんとして銀漢の波咽ぶほとり、
天上秋の光引て今搖落のわが世に下り、
遠く鴻雁の列を誘ふて下界の山河いづれを經るや。



楊柳の岸かげうすくセインの流咽ぶ處、
菩提樹畔の逍遙の群も夕に消もるほとり、
弦月旗はしづむボスホル海峽の暮、
牧笛聲は愁ふ中央亞細亞の野、
行てシベリヤ大荒の東、黑龍の水萬古咽んで、

神人共に憤る蠻族の罪をかたる處、
去りて黃海の波を越に、長白山の雲を拂ひ、
更に遙に扶桑の空に玲瓏清き富士のたかね、
其影やどす東海の名も清見潟田子の浦、
鏡とすめる波のおもに秋をしらして過來しや。

白蘋の州紅蓼の岸、漁翁の夢の清き處、

鮮血の流屍躰の岡、文明の鬼の狂ふ處、
山川風土互に替る大地の旅幾千里、
玉殿のもふまぐれ醉生の夢を驚かし、
落葉の夜半の窓詩人の情を動かして、
中天搖曳の雲と共に吹きさり吹きくる無限の秋風。

五城樓外西郊の夕、その秋風の聲に色に
高きに登り眺めやりて獨り悠々の思つきず、
英雄の覇圖猶あとをとむる廣瀨の流青葉の森、
水は寒山の影をひたして溶々遠くはしるあなた、
碧は深し萬里滄溟の水、其波を越に海を越に、
行く〳〵吹て雲を拂ひ思を誘ひ詩を含み、
天地の呼吸清く遠く無限の旅を追うて進まん。



千叢のすゝき波を亂して滿山の秋今まさに深く、
夕陽いつか西に入りて餘光の遠く溢るゝ處、
山河自然の雄麗をよそひて示すは天上無窮の榮か、
その雄麗の景に對し、その清冷の風に吹かれて、
思は長し氣は遠し、――塵骸しばらくは聖かれよ。

人間歷史ありてより星移り行く五千歲、
進化のあとは短くて禽獸の域遠からず、
一塊の地球今も猶たゞ反噛のにはとして、
世紀最後の秋風はさゝに悲哀の曲と吹く。

詩人哲人いくたりか我世にいでゝ道說ける、
靈鷲の峰に法の歌、橄欖山に愛の聲、
オレブ、シナイの嶺の上、アラビヤ、ペルシヤ野の邊、

光は暗にかゞやきて名あり言あり道ありき。
遺流千年遠くして今聖壇の焰消に、
博愛の教悼むべくたゞ呑噬の具となりて、
虎狼みだりに滔天の罪を文明の名に犯す。
妻は汚され身は斬られ國は削られ屋は燒かれ、
天を仰で血に咽ぶ民よ『異教』は何の罪、
大義を叫び唱ふべき輿論の聲ももだせるか、
良心の痲痺に耳聾ひし基督教徒何の名ぞ。
かくて美妙の天地の裏たゞ流血の場にして、
世紀最後の秋風は悲哀の曲と吹き去るか。

嗚呼おほいなる無窮の靈、
天を張り、海をのべ、雲を卷き、風を吐き、
日月を驅り、山嶽を震ひ、





千萬の星を造り千萬の世を治むるもの、
風にありて吟じわれにありて歌ひ、
花にありてゑみ、星にありて照る、
俗僧の悟らざる迷信の汚さゞる、
宗派の私せざる空理の知り得ざる、
愛の神、進化の神、詩人の神、
爾の胸にわれよりて爾の靈にわれ祈る。
爾ゐまして人ゐゝにあり、
合理のゐと必ず現實、現實のゐと必ず合理、
有情の天地いつまでか常に混擾の局として、
人種の差異に同胞の四海の愛を壞るべき。
あゝ願はくは爾の呼吸天のはてより地の隅に、
吹き來る無限の風となりて禍惡悉く吹き拂ひ、
光と愛と詩とをして永く此地を掩はしめよ、

世紀あらたに替る後秋風愁の曲ならず。
其行くとおろ吹くとおろ歡喜の色の世に滿ちて、
あらしの聲も天上の無窮の樂と響くまで。

（十一月一日國見峠にて起稿）

## 朧夜

よるの櫻の木がくれに
笑むは羽あるちさき子か、
引くかしぼるか白銀の
弓かおぼろの月影か。

まじるも熱き二人の息、
打つもひとしき二人の脈、
燃ゆる思に聲絶へて
語るは二人のまみとまみ。

夢より淡く地にうつる
影と影とは手を取りて、
雪と散り來る花びらは
ふたりの肩にわけうけて。

いみじき脆き春の夜の
霞にしづむ鐘の聲、
ふたりの耳に聞きわけば
無常の音にはあらずかし。

嗚呼あめつちの戀燃て

月と花との契れる夜
誰かは咎むわかき世の
戀と春とに醉へる夢。

## 清怨

遂げなば何の戀ならん
酒、酢とならば何のかひ
月と戀とは春の夜の
たゞ朧おそやかしけれ。

清きはたが名たが戀か
春は今宵も花なるを
あなた興津のあだ波に
月は今宵も碎くるを。

よその戀路の恨きく
みたりの友に涙あり、
過世あやしき人の子が
髮のほつれや袖の香や。

ともしびまぶし打そむき
拂ふもよしな膝の露
もみの小袖のうらみつゝ
今宵もぬれん枕紙。

その口べにの筆かりて
月と花との影に添ひ

障子にうつる痩する身のはそる思をしるすべく。

遂げなばさはれ何の戀酒酢とならば何のかひ月と戀とは春の夜のたゞ臍おそもかしけれ。

## 夕の姿

鐘のひゞき、水のひゞき、うするゝ光、うするゝ烟、あゝ別なり夕の姿。





しづまる風、收まる雲、睡りもく花、覺むる星、あゝ別なり夕の姿。

無韻の歌、無窮の敎、無聲の樂、無限の思、あゝ別なり夕の姿。

あゝおさなおが甘き乳と愛とを湛ふる母の胸に頭をよせて眠ふる如く

『夕』のおろもの裾のひだに浮世の煩ひ浮世の惱み

つゝみて靜かにわれは休まん。

## おほいなる手のかげ

月しづみ星かくれ
あらしもだし雲眠るまよなか
見あぐる高き空の上に
おほいなる手の影あり。

百萬の人家みなしづまり
煩惱のひゞき絶もるまよなか
見あぐる高き空の上に
おほいなる手の影あり。



あゝ人界の夢に遠き
神秘の暗のあなたを指して
見あぐる高き空の上に
おほいなる手の影あり。

## 富嶽之歌

夕をかざる玉鉤の一彎遠く消沈み
暗人間の世に落ちて今は壺中の夜もなかば。
有聲無象の窮まりはあゝ穹窿の空の上
數も千萬、永遠の姿を凝す星の花
わが射る光途遠く流るゝ末を見おろせば——

影朦朧のたゞなかに西崑崙の雲の嶺
冷煙おほりうづまきて泰山暗し鬼神の府
羅浮天台のおもかげも今は下界の暗の底。

千里二千里三千里烟波眠れる東海の
うな原遠く眺めやるわれらの光さすとおろ
渾沌の世に湧き出でし姿不變の富士の嶺
太古の雪の膚清く暗を照して立てるかな。

あらしも今は収まりて人籟絶ぬさらばいざ
光と共にわが露を、露もろともにわが歌を
下だし送らむ仙嶺の頂遠く裾廣く。





露

光含みて珠とおり珠とおほりて露と呼び
暗にもしるき香を添うるわれ銀臺の星の精
長松の蔭暗うして鶴の靜かに眠るとき
幽谷のあらし收まりて蘭の微かに匂ふとき
西に傾く銀漢の流の末と下り行く。

行くゑは遠し東海の波まに近き富士の嶺
嶺に下れば白銀の、また黃金の水湛へ
麓に布けば花のへに帝鄉の夢もの語る。

嶺上明水

珠貫貝聯かげ凝ほり玉露となりて嶺の上
千古の雪のしたゝりも交へ湛ふる水かゞみ

寫る光は仙嶺の夜半の星のおぼる影
酌みて飛仙の盃の沈瀣の味思ふべく
餘滴靜かに谷あひに玉と碎けて走りては
行末遠く香を浮けて麓の花を誘ふべく。

花

高ねおろしの夕かせに
われ咲き匂ふ花の子ら
およひ御空の友そゝぐ
戀のしづくぞ身にしげき。

見渡す廣き八州の
裾野の夜も靜かなり
かしらを垂れて行く水に





さゝやぐ思人やしる。

おゝに開きておゝに笑み
おゝにしぼみておゝに散り
過ぎし幾春幾千とせ
自然の子らと友なりき。

御いつかしおきみおの御手
かざすつるぎに散る焔
夷滅びてすめろぎの
よさし廣みし世もむかし。

時おし移り紅に
白は替る旗の色

君が裾野の狩りくらの
たけき競ひし樣もまた。

春のつばくら秋の雁
いそぢの驛の行返り
振ふ錦の花の袖
うつろひ行くもきのふにて。

いつしか布かる黑がねの
道に近づく西ひがし
烟あらしになびかせて
火輪かけかふ世の姿。

時は移りぬ人去りぬ



獨り裾野の花の子ら
替へぬむかしの香をとめて
胸にはつゝむ歌絶にず。

およびしづくの身にしげき
御空の星の戀の歌
受けて傳へて行く水に
さゝやぐ思人しらじ。

流

銀蛇幾すじ幽谷の泉しづかに集りて
ねは玲瓏の玉いくつ碎けて走る夜の空
西と東のいさら川流るゝ道に呼びつゞへ
靈山の名を身に負ひて下るも長し六十里

けさは浮べぬ白帆かげ夕は洗ひぬ汀の日
今はた誘ふ一ひらの花にのせ行く星の夢
わだつみさして道遠く行けば流れん時も世も。

海

潮は通ふ東海の流みなぎる三千里
銀山碎け飛散りて行くゑ四海の沖はるか
經緯異なるもゝの岸洗ひて歸る千重の波
波に明珠の影鏘りて光は震ふ星の色
いさりび時にほのめきて煙は迷ふ清見潟
夜深き岸の松が枝に仙女の樂は響かねど
さゝに流の送り來し花に無限の春の歌
あしたの光照りもせば我も自然の樂かなで
扶桑の鎭め靈山の姿を波に涵すべく。





風

其影宿す万頃の東海の水下に見て
高ね下りし夕あらし無象の翼身は輕く
北斗の影も見にぬまで波路はるけし幾千里
椰子橄欖の香ににほふ南溟の空吹拂ひ
暖潮の蒸すむらがる友をいざなひて
今さそ歸れあけぼのゝ空合近き富士のもと。

雲

歳のなかばは夜の晴、晴に暮れる紅血の
日に氷山の影もるぎ波もあらしも凝ほり行く
千古の冬の北洋の眺さびしき空の上
萬里を翔くる鵬の羽を怨ち借れる自在の身
南をさして驅け行けばよもより集ふ友の群

奉ぬて寄せん東海の芙蓉の峰の空近く。

詩神

はやも下界の空しらむ時風雲のいざよひに
天地創生のあさぼらけ昔のあとぞ忍ばるゝ
暗逃れて旭陽の光はじめて照りしとき
四大おの〳〵其則に就きて渾沌の去りしとき
われ九天の水引て東海萬石の波湛へ
玉闕の柱つんざきて芙蓉千仞の基おきぬ。

天地の間靈岳の氣に清風の吹てより
黄鶴露を吸去りて秋白帝の樓に飛び
青鸞花を啣み來て春瑤臺の仙を乘せ
彩雲永く一帶の天衢に通ふ路引て





神韻妙詩おのづから嶺に收まる幾千秋、
此邦いまだ此山を歌はんと聲はあらずとも
玉露明星もろともに永く宇宙の靈に聽き
花蕚川流とおしへに中に不朽のしらべあり。

嗚呼東海の君子國、史は百王の跡遠く
二千餘年の春ふけて斯文の華の遲くとも
香はかんばしき千載の未來の望無からんや、
群巒遠く下に見る芙蓉の姿雪の膚
清きは民の心たれ高きは民の思たれ、
積水淵を湛へてはうち蛟龍の湧くがおと
積塵山を築きてはかみ風雲を捲くがおと
長きに忍ぶ此邦の理想は實と現はれて
天地無窮の「美の靈」に民の融化し入らんとき、

扶桑の俗を改めて八朶の芙蓉比なき
影東海の波のへに萬邦の仰ぎ視なんとき、
其時今にはのみせて靈山の空明けわたる。

見よ萬頃の海鳴りて波黄金の花開け
紅雲錦の粧を凝らす朱陽の曙の色
希望の光うらわかく峰千秋の雪に照り
愛と匂と聲樂と皆ひとつなる天上の
無限のほまれはの見する富士のたかねのあさぼらけ。

（註）＊　弦月のふと
＊＊　富嶽の頂に「金明水」「銀明水」あり
＊＊＊　星のふと
＊＊＊＊　"Beyond the starry dome, in the realm of the blessed, Love, Music and Fragrance are the same." —Anon.

曉鐘　終

# 附錄

## 汀上の逍遙（ユーゴー作）

### 第一　逍遙

すざましき潮の底におほいなる渦卷あり、
其秘密の深淵より湧き出でゝ、
みどりのたゞなかに雪のおとく、
泡沫の旋風波上に碎けぬ。

此飛沫の淵より神は何を造り給ふや、
曙の光りはおゝに何を注ぐや、夕の暗に何かおゝより出るや
海はおゝに注ぐいたづらに其波を、
雲は其霧を、あらしはその響を。

あらしは其響と共に、潮は其泥と共に過ぎさりぬ、
漁人の恐るゝ旋風は
おのものすごき淵の中に現はれて
常に同じ場と同じ沫とを保つ。

漁人は語る『かしこに、尊き波の上に、
失せたる幼子は降誕節の夜を待ちて
人界に汚れし其翼を清めんと來る、
天使となりて天上に飛去る前に』と。

われは曰ふ『神は潮の先に絶壁の先に
かしこにかく白き清らの場をおきぬ、
おほいなる自然の胸の中
惡のたゞなかに善の姿たらしめんため』と。

第二　逍遙

海には泡、陸には沙、
みどりの中に黄金の光は白銀の光と混じぬ、
われは洋々たる大氣のひゞきをきく
遂に沈默におほはるゝ遠き大なる響をきく。

呼ぐ海の岸にひとりの幼子は歌へり、
何物もおほいならず、何物もちいさからず、
神は創造の上、受造の上に
同じ黄金の星と同じ緣の大空とを置きぬ。

われらの運命は微、われらの幻は美、
靈は肉躰を捕へて大空にわぐ、
人はおほいなる二つの翼もて飛べるもの、

ひとつの翼は思想なり、他の翼は愛なり。

すべてのものしづまりて、おだやかに、やさしく、力あり、
舟は港に入り鳥は巣に歸り
すべてのもの去りて休みにつきぬ、余は
大虛の中に無限の「愛」脈うつを覺にぬ。

たゞ風――彼は巖の上に芦葉をかゞめ
また歌へる幼子の聲をはおびさる、
嗚呼風彼は草葉をかゞめ
また同時に遠く歌をはおびさるよ。

そは何かあらむ、おゝに物みな互に愛し互に睦む、
心の中に暗なかれ、にがき思の惱なかれ、
言につきせぬおほいなる平和は
絶にず大なる靈の底より大なる波の上に來去す。

## 第三　逍遙

日は傾きぬ、「夕」は彼を追ひて
地平線上を染めぬ、
汀上の石によりて白髮の一老翁
悄然落日に向ひて坐しぬ。

彼は老牧者なり山上の牧者なり、
昔はわかく貧しく幸なりき自由なりき、
夕の影丘陵をねぶりしとき
其笛林中に幾たびか響ける。

今は老いて富める過去のかたみ

彼はおほいなるやからの長となりぬ、
牛羊野より歸り來るとき
世を離れて彼は天を思ふ。

沈まんとする日は昇らんとする日に劣らず、
老牧者はたゞのみぞりの天の下にもめむ、
目前の大洋は悠々波を堪へて
墓に臨める義人の希望に似たり。

嗚呼おおそかの時刻よ、山、海、風
悉く默して其騷ぎを收めぬ、
老翁は將に沈まんとする日を望み
日は將に終らんとする老翁を望む。





神よ、影に染む山々いかに美はしき、
海いかにやさしき、空いかにすめる、
過ぎ行く月日何かあらむ、
我は無限に觸れぬ、我は永劫を見ぬ。

あらしよ、うれひよ、我靈の内に默だせ、
我心かくまで神に近づきしとはあらざりき、
落日は焰の目もて我を見ぬ、
おほいなる海我に語りぬ、われは身の聖きを覺ふ。

我を憎む者に幸あれ、我を愛する者に惠あれ、
我はわがすべての時を靈と愛とに與へむ、
譽を求むる者はおろかなり、理をあさる者は愚なり、
余は——余は只愛するを知るのみ、殘れる齡幾何もあらじ。

紅日沈みかゝる海上より星は出でぬ、
鳥は歌ひぬ、波は脚下に叫びぬ、
莊嚴のたゞなかに日は落ちもきぬ、
あゝ見よ、靈いかに大なる、人いかに小なる。

すべての造られしもの、燃もる火、震へる海
みな至上者の名をたゞなかば知るのみ、
彼等の發する響きを集むるはわれなり、
おの〳〵のものは片語を綴り、余は全句を語る。

淵よ、爾と等しくわれ聲を天に擧ぐ、
海よ、我爾と共に夢む、山よ余爾と共に祈る、
自然は清淨永遠の香、

余は――余は優美有情の香爐。

## 深淵（ユーゴー作）

人

あらもる非生の間にありて獨り生ある靈を見ずや。
猛獅を沙漠に逃げしむるものは我なり、
戸閉づるとき鍵を造るを知るものは我なり。
われはバッカスといひ、ノアといひ、ヂューカリオンといひ、
セイクスピアといひ、ハンニバルといひ、セイザアといひダンテといひ、
勝利の劍を取り「影」を逐ひ暗を驅りて、
あらもる恐の中に入り、あらもる暗の中に進む。
われプラトウとなりて能く見、
われニュートンとなりて能く探る。

光榮のアゼンスは梟より出ですや、
壯大のローマは狼より起らずや。
大空の猛鷲驚きていふ、『わが途途に爾におくる』と。
われ墓の中にキリストを有し塵の中にヂョブを有し、
衡平を保ちて兩手に肉と靈とを運ぶ。
われ遂に人なり主なり自由なり。
我は古のアダムなり、我よく愛し我よく知り我よく感ず。
我『生命の樹』を抱き、さながら嵐の呼吸の如く、
金果累々の枝を震ひて曰ふ
『民よ、走りて而して拾へ』と。
かくてあらゆる果物は雨の如くに落ちぬ。
わがため、わが子のため、人間のため、
科學は惠みの天より降り、生命の果は永劫の根よりいづ。
あらゆるもの萌し、あらゆるもの育ち、



野火の林を掃ふが如く『進歩』は天を仰て走り、
『過去』を呑み去りて萬物みな進み行く。
われ欲すれば物みな從ひ、不屈のもの悉く讓る、
われは全能の神に似たり、
彼は室を作り、われは酒を釀す。
先に獄なりしもの今は宮殿なり。
われ南極と北極とを結び、
靈を電光の翼に載せ、
チムロットの鐵弓を張り、
鏑を鳴し矢を飛ばし、
四海に放ちて、わか言となす。
距離なるものは今すでに存せず、
ライン、ガンヂス、オレゴンの流、
わが見るところ恰も同車の旅客の如し。

老いたる巨人其名は『望』といふもの、
我今之を矮人となしぬ。
わが奮進の前ダイタン嫉みて頭をもたげ、
フランクリンの電光を飛ばすを見て、
コーカサス山上驚きの聲あり。
むかしヂユピタアが塵中に投せしもの今フルトンとなり、
鯨鯢を驅りて大海をわたる。
カルバニは『死』を滅し、
ボルタは天使の劍を熔かす。
世界はわが聲に震ひて替り、
カイン死して『未來』は若きァベルに似たり。
我再びエデンを得ん、われ再びバベルを興さん。
我なくば何ものか存せん、自然は初なり、我は終なり。
嗚呼地球、爾の主たり王たる我を見ずや。



## 地球

爾はたゞわが一小虫なり。
睡眠、憂苦、冷熱、飢渴
爾に無數の煩を負はす。
爾老いては幻なり、死しては爾たゞ影なり。
爾は塵に去り、我は白晝に殘る。
われは常に春あり花あり、愛あり曙(あけぼの)ありて、
千萬の年を經て猶わかし。
我一粒より大樹を作り、我一核より長松を起す。
我は葡萄の房を染め、或は黃穗の束をつかぬ。
晝の十二時夜の十二時はてやかなる姉妹の如く
手を取り舞うてわがおもてを廻る。
我は源なり、混沌なり、われ物を葬りわれ物を創む。
綠の空に『朝』の生れしとき我そこにありき。

ウエスビアスはわが工場なり、ヘッラ山はわが吹爐なり。
我はエトナの高き煙突を赤うす。
われクッコー山をもるがせばピレ子ースの嶺また震ふ。
我に僕として星ひとつあり、
『夕』來りてわが一面に黑布を掛くる時は
やさしき月ありてわれを照す。
凶人もし森の中に、暗の中に、
影の中に逃るゝときは
我おの燈を取りて彼を追ふ。
われ火の中、波の中、空の中に生を起して、
或は虫を生み、颶風を生み、鯨鯢を生む。
わが牛ける圓球は大水深林高山に
掩はれて恰も冑を被るに似たり。

土　星



微かにつぶやく聲は何ものぞ。
地球よ、爾一粒の砂、
かの一片の灰に伴はれて狹き境を廻る何の用ぞ。
我は壯大の綠空にわが大圓周を畫く、
大虛は見てわが雄麗に驚く。
わが大寰は青白き空を紫にして
恰も金丸の如き七ッの大月を抱く。

太　陽

しづなれもだせ大空のもとに、わが遊星よわが群臣よ、
我は牧者なり爾は牛羊なり、
二ッの車大門を過ぐる如く
土星と地球と並びてわが最小の噴火口に入らむ。
混沌よ我は法なり、泥よ、われは火なり、
見よ、われは生命なり中心なり、

太陽なり、永劫なる光のあらし也。

天狼（シリウス）星

あゝ此原子（アトム）何をか語る、もだせ塵なる太陽、
もだせまぼろしよ微けき光よ、
其牛羊大空に散る牧者よ、遊星のあるじよ、
緑の空の中爾七八の牧をもてる何の效ぞ。
我は壯大なる圓球の中に百千の火球あり
其火球の小なるもの猶百の月を有せり。
あゝ夫の微球と並びてかゞやくも益なし、
矮人星は巨人星を見るとあらじ。

アルデバラン

天狼眠りぬわれ覺めぬ。かれは殆んと動かず、
我に白と赤と緑と三ッの太陽あり、
各世界の中心となりて無形の鎖に繫がりてめぐる、



其速きさとさながら醉へる焰の如し、
電光は曰ふ『われ彼等に從ふさと能はず』と。

アークチューラス

我に四ッの太陽あり
其よつの光たゞ一道の電光をなす。

彗星

われは『夜』の恐なり彗星なり。
われ過ぐ、震へ衆世界よ衆太陽よ、
我見るとさろ爾はおの〳〵たゞ一粒の芥子なり。

北斗七星

神秘の腕われを常に大空にもたぐ。
われは北天の燈明臺七ッの枝を有するものなり、
わが火は一切の終る大虛のはしに目ざむ。
北極より南極に、あらゆる赤道のもと、

あらもる熱帶のもと、あらもる宇宙は曰ふ
『汝れ恐るべき極天の黑守兵なり』と。
暗き天空の精氣、衆圓球に滿つるもの、
かれ我の何たるを知らず。
我大空に目さむる時彼われを見つめ、
大なる光われの進むとき、
彼たちて震ひて、わが進軍の響を聞かんとす。
彼われを天空にさまよふ巨獸と見なして
われに恐るべき名を與へぬ。
我は北なり、光なり、目なり、
生ける七ッの目、太陽を瞳子とするものなり、
永劫の暗に照る永劫の焰なり、
われは爾等の上に現ずる北斗七星なり。
天狼は其すべての圓球を合して



猶わが最小の爐中一點の火花に過ぎず。
我が二ッの火の間に百千の世界は悠々としてあり。
われはひかる天空の頂に住む、
彗星の光もみどりの深空に轉ずるわが車に觸れじ。
天の衆星その黃金の球と
白銀の月とを曳いてゝに來りかしゝに去る、
我もし進んで夫の精氣の大海に入らば
一切の太陽皆わが途に碎けん。

黃道十二宮

爾の道わが道に比せば何かあらむ。
爾の光天のいづゝより來るも
皆深淵の底盤たる我にあたる。
我は衆太陽にいふ『爾去れ』
『爾來れ』『今爾の順なり』『我爾を呼ぶ』と。

我ふゝにありて人は綠の空の中に
弓、手に逐はれて猛、獅、金牛、白、羊の走るを見ん、
われまた秘密の井中にかの實、瓶、をしづむ。
我は巨大の輪機なり、
無象の秩序われより出でゝ
かすかに光る深淵に下る、
人目もし空の深奥に入り、おほいなる恐のたゞなかに入らば、
聖きフレガートンの流に黑むィキションの如き
恐るべき罪人、苦める、おほいなる魂を見ん。
かれらは高きに到らんとし、
あなたに走る星を棄てあなたに來る星に乘りて
深夜のすゞき階段を上らん。

銀　河

百萬、千萬、無量億の星、——
すゞき影の下、きよき覆ひの下、
我は莊嚴なる星宿の森なり、
我は目と光との集合なり、
さびしき、音なき、光の厚みなり、
わがかゞやく淵は常に劫初の流に溢れて
あらゆる爾等衆星の源なり。
嗚呼低きにある星よ、我は爾を去ること遠し、
わが宏大雄麗不動の海、
わが無數の太陽の集りは
鈍き爾の見るとおろ、たゞ大空の底にありて響の絕ゆる荒漠なり、
暗夜にひろがる紅灰の一片なり。
さはれ我が生ける光の中に入るものには何等の恐ぞ、
わが紅雲を近きに見るものには何等の恐ぞ。
點はおの〳〵星なり、星はおの〳〵太陽なり、

星限りなし、奇異壯大のもの限りなし、
或は天使に似たり、或は惡魔に似たり、
遊星の數はた窮なし。
宇宙の衆群内に情あるもの生あるもの、
おの〳〵一の太陽をめぐる、
人おの〳〵心あり靈ありて、
六合にわたる眼目の映ずる鋭なり。
心おの〳〵愛あり、靈おの〳〵天あり、
おの〳〵生れ、おの〳〵死し、おの〳〵長じ、おの〳〵衰ふ。
内に光滿ち、内に暗溢る。
わが下の谷の中、わが光に眩めきて
遠きにかゞやく光りの粒、
なんぢ衆星、爾衆球、爾彗星、
爾黄道寰、爾震ひて青白き太虚をわたるもの、



爾の音は遠きに響く胡角に似たり。
我が太陽を有するは爾が蚊を有するよりも多し。
わが無限大は生けり、かゞやけり、豐かなり。
時としては千萬の世界暗き穹窿の偶に迷ふて
わが光の中に消し去るにあらずや。

星雲（テビューラ）

遠きを走る一片の塵、なんぢ誰にか語る。
大虚の中我殆んと爾の聲をきかず、
我はたゞ爾を暗光として夜の綠の空の偶に知るのみ。
我をして靜に照らしめよ、我は暗の白きものなり、
すさき混沌の中に生せる幽界なり。
我に南極なし、北極なし、
我は理想中の生ける現實なり、
廣大なる夢の群われよりいづ。

浩蕩たる精氣の大洋涯なく岸なく
其流一たび去りてまた歸るおとなし、
中に神秘の島嶼を造るものは我なり。
無　限
一切のもの、わが暗き合一の中に生く。
神
我一たび吹かば、萬有おとゝく空たらむ。

（譯者附記、固有名詞は皆英吉利讀みとなしたり一定の日本讀みとなれるものは其まゝ）

## 故郷の墳墓（ユーゴー作）

（『冥想錄』を亡女のかたみにさゝぐる歌）

一

永遠の眠の床より起ち、冷めさき布の蓋ひを去り、
目を擧げ手を開きて此書を取れ、
おを受くべきものは爾なり。
我が靈魂、わが企望、わが夢、わが恐、わが悲、みな此中に混じ、
わが生の幻、わが痛、わが光のあけぼの、また之に續ける愁の夕、
影とそのあらしと、薔薇とその花冠と、
みな此中にあり。
或は樂しき或は悲き此書はいづおより起れるや、
陰霧をつんざく青白き電光は何處より來れるや。
四歳おのかた我は凄冷の風雨に住ひき、
此書はおゝより出で來りぬ、
神は口授し口授しぬ、余は書き取りぬ。
余は風に散る一片の藁なりけり。
靈は曰ふ行けと、かくて余は去りぬ。

而してわが此書を終りしとき、
此書形をとりて初めて動きし時、
壁は綠蘿を纏ひ塔は挽歌に
鐘聲を混ずる野なかの寺は我に語りぬ、
『爾の歌は終りぬ、詩人よ、そを我に賜へ』と。
風吹き渡る碧の森また曰ふ『我そを請はむ』と。
花を點ずる牧野は曰ふ『そを我に賜へ』。
海はその書の開くを見て曰ふ
『いかなれば我之を得ざる、かの書また一の舟なるものを』。
星は曰ふ『此讃歌を受くべきものはわれよ』と。
おほいなる風また叫びぬ『夢みる者よ、そを我に與へよ』。
しかしてまたの鳥は曰ふ『人寰を遠く離れて育ちし此書、
君は人間に與へんとすや、わが翼に乘せて之をわが巢に運ばしめよ』。
さらばわれ、わが書は風に與へざるべし、



あらしに狂ひて潮を吐呑する海洋また之を得ざるべし。
蜜蜂群がるみどりの野、
時その針を轉ずる野寺の塔、また之を得べからず。
之を得んもの牧場にあらず、星にあらず、
鷹にあらず鳩にあらず、すべての鳥にあらず、巢にあらず。
——われ之をたゞ墓に與へむ。

## 二

あゝ、昔九月秋風の夕、
飄然友を捨てゝわれ郷を去りき。
巴里の都はかなたに隱れぬ、知人の影は一も見にず。
聲なく言葉なく見るとなく、われ獨り逃れぬ、——
たゞまれ茫然たる一孤影。
たゞわれ知りぬ、われは其行くべき處に行かむと。
嗚呼『われ惱む』の聲猶わが口に出でざりき。

而して深谷の底に引き入れらるゝ如く、
路の險夷、空の寒温、われはつゆも覺にざりき。
（往事さながら夢に似て山嶽いたみて聲も無し。）
母と姉妹と屋裏に哭せる時、
われは失望の力に驅られて起ち、
散髪を北風に亂して、
古寺の傍、蕭條の郊野に行き、
天を仰ぎて彼女の墓に近寄りぬ。
樹林は呟きぬ『來るは父なるものよ』と。
かくて荊榛を踏みわけて荒墳の間を過ぎ、
苔に掩はるゝ石の上、亂枝のなかに膝つきぬ。
あゝわれ呼びしとき爾の眠いかなれば覺めざりし。
一竿を肩にせる無心の漁父等は怪みて過ぎぬ、

『かの思に沈める、夢むるものやたそ』と。
かくて日は暮れぬ、長く印せる地上の影と
夕づゝの光と前後共に消に失せて、
われ獨りわれに聽けるものに訴へつ、
其綠の草の上、わが晴天の暮れ行くを眺めし處に、
點々にがき涙と共にわが萬石の愁をそゝぎぬ。
一片また一片綠の葉を心ともなく摘みとりて
忍ぶは彼がいはけなかりし昔の日、
百合の花薔薇の花を我に持ち來りし時、
さゝやかの手にわが筆とりて、
くれなゐの指を染めつゝ笑みし時、——
忍びてかくて墳上に育ちし花の香を嗅ぎて、
冷めたき綠の床を見つめぬ。
其墳塋を貫ぬきて射りしはそれか靈魂の光か。

さなり、幽冥彼を奪ひしうれひの時刻、
傷心の空と悲痛の胸とに響けるとき、
妨げあらでわれかの墳を弔ひき。
あゝ今は……流よ、森よ、幽谷よ、彼女は知らむ(然らずや)、
四歳(よとせ)おのかた光照らざる淋しき心、われ行て
夫の墳上に祈らざる――そは我罪にあらざるを。

三

されば かの暗き路、みぞりの苔、冷(ひやか)の墓、
陰林咽ぶ夕の野寺、
墳墓に注ぐ悼みの吐息、
その辛さは今しおもへばさちなりき。
おの年おろ爾何事をなしつるや、
暗きすみかの中爾は生命を今見るや、
いかなる影の日時計もて爾は時を測るや、
爾は時に音なく他の眠れるものを押しやりしや、
爾はわれを待ちて半ば目ざめしや、
爾は無限の暗窓によりて影の中に旅人を探しつるや、
暗き永劫の中に來れる者を聽かんとて
緩く纏ひし葬衣の中より爾は、耳を傾けしや。
『そは誰そや、わが父いまだ來らじ』と
かくて沈める船のおと再び暗に身を伏して
聲も微かに爾等ふたり共にわが上を語りしや。
げにいくたびか露を帶びて
庭より心よりわれはた百合花を集めけん、
げにいくたびかわれ野薔薇の花を集めけん、

いくたびか『明日は別れん』とつぶやきて
アルフユールの塔にわれは音訪れけん、
かくて愚かにも風と迅き船とを待ちわびつ。
さなく我手は悲みて開きぬ、我曰ひぬ『もの皆移る』と、
かくて集めし花束は慘として暗夜に落ちぬ。
嗚呼彼女のわれを待ち詫びんを思ひ
心に秘めし思を取りて
かしこに行かんものに託せんとせしも幾度ぞ。
基督呼びしときラザロは眼を開きにき、
われ彼に呼びしとき彼の目いかなれば開かざりし。
影の秘密をふたゝび『愛』の破らんとなしつるは、
神のなしゝことを父も爲さんと願ひしは、
そはあやまてる擧動なりきや。

四

微けきたよりの此書いかで
行きてかの沈靜に叫き、かの岸に流れんとを、
愛の吐息、愛の涙此書いかで
あなたに落ちて墓に入らんとを。
その墓さきには露と曙と春と接吻と
美はしき花嫁のゑみとともろともに
わが喜、わが心を呑みさりきを。
いかで此書僞らぬ希望の叫、
嘆の歌、別の聲、
はた羽かせ我に觸るゝ夢とならんとを。
さらば彼女は曰はん『あるもの來りぬ、われ聲をきく』と、
此書いかで暗夜の中わが靈魂の歩みたらんとを。

此書されば曙の白き鳥の、

はた夕暗の黒き鳥の飛びかけりわふ無數の群、
此書ふれ地平線外に走る『追憶』の翱飛、
此書ふれ囚居の戸よりわが送りやる混沌の群、
空よあらしよ風よ雲よ、われ汝に之を託す、
しづかに我に呟く空の大波
いかで此書をいとしみて遠くあなたに送れかし、
風は心して散すとなく
冷めたき墓にまめやかに
離れて遠きわがたまものをいたせかし。

嗚呼げにわびしき卷の中に、
大空の下に集めたるしらべの中に、
此書の中に、歌謠の中に
わが日、わが禍、わが悲、わが煩悶



わが愛、わが勞、わが日々の生を記したれば——
神なはいまだわれのみまかるを許さゞれば——
さはれまた我行きて彼に語らん要あれば——
秘密とあらしとに滿てる此書の上に
無限の劫風の吹くを我感ずれば——
人界の暗と哀れと思とを皆之の中に注ぎぬれば——
わが靈わが血わが心より
此暗きさびしき歌の韻をわれの作りたれば——
いざもけわが書、暗空を過ぎて
あらもる遲き歩みの向ふあなたに
木の葉の如くたましひの如く
行きて青苔と暗夜と墳塋とに飛べ、
一切の名あるものゝ皆はしり行く深淵に行け、
墳墓の最も幽深なるかしこに落ちよ、

さらば彼女の側に、かしこに眠る光る莊嚴の天使の側に
見るものあらん此書の――深淵の幽花の開くを。

五

あゝ曙のみどりの空、爾は我を欺きぬ、
あゝ人界の幸、爾をつらく我は償ひぬ、
世には墳墓に語るものあり、
さびしき青白き死者に語りて
葬衣の黑きひだを震はし、
其言或はあらく或はやさしく
石を動かし波を動かし雲を動かし
恰も森の響の如く自然の一の聲となるものあり、
我いまかゝる伴に加はるの權を得たり。

あゝわれ墓標のたゞなかを進み、
群木叢枝の中に髮を亂し、
靈魂暗に迷ひて棺上にうつむき、
鉛に釘に地上の虫に、
冷かに笑める骸骨に、齒を喰ひしばる骸骨に、
指固まれる手に、頭骨に、
祈禱を知る脛骨に悟を求めしも幾歲ぞ。

あゝ我すべてを穿ちぬ、すべての底を探らんとしぬ、
禍福いかなれば世にまとる、われ之を知らんと願ひき、
われ問ひぬ『我何をか信ずべき』と、
われ光と曙とはまれと
たのしき幼子と清き乙女と
愛と生命と靈魂と皆悉く之を究めぬ。

我何を學べりや、われすべてを攫みて一も得る處あらざりき、
我多くの夜を見ぬ、我多くの空しきをなしぬ、
吾人何ものぞ、『つねに』の語は何の意味ぞ、
われ胸中に穿てる墓に
夢と愛と望とを皆悉く葬りぬ
誰か悟を得る、敎いづくにある。
あゝ我ふたゝびいにしへに返り
草のうへ牧場のほとり森の傍、
夕燒けの空にほゝゑみて幼きむすめの
白き小さき手を取りつゝ、
喜に溢れ平和に滿ち、
空のかゝやくにまかせ、小兒のあまもるに任せ、
かの碧空とかの無心とに身の濕さるを感じ得ましかば。



光る大神と、敬ふ天使と、
われ此間に爭ひぬ、われ勝ちぬ、恐なかりき、悔なかりき、
俄にわが門『死』の前に、
恐るべき暗影の不意の音つれに開けぬ。
あゝ神秘の靈、爾空しき碎けしものを殘して去りぬ、
爾わが天使を捕へぬ、爾彼を打ちぬ、
それよりさのかた墓はわが足の向ふ處となりぬ。

六

セインの岸の道遙も今は叶はず、
われいにしへの道に今はに行かじ
井のふちに座る洗婦の如く
永劫の深淵の壁に突き當るの外はあらじ、
恐るべきソリムの爲め巴里はわれに閉されぬ。
ノートルダムの高塔は今沈默と暗夜とを有するのみ。

而して頭上にわれは星辰の殿堂を仰ぐ、
吾は叫ぶ『ルーアン、ガレクユール、カアデベック』と、
『影』はわれに叫ぶ『オレブ、セドロン、バルベック』と、
而して吾去らんとすれば『影』直ちに我を留めて曰ふ、
『みどりの大空に向け』と、
われにいふ『爾の路は塞がりぬ、
爾いま夜と風と流とを見よ、
爾何をか思ふ、幽獨者、爾何をか爲す、
爾足下に大地ありと思ふや、
運命を離れて心ともなく爾何れに行かんとするや。
あゝ夢むる者、爾萬有天地を顧みて
波浪の中に靈魂の響を聽け、
爾もし世に意あらば顧みて俗界の煩惱を思へ、
爾もし髮に塵を混せんとせば



せめては巨大の塵を求めよ、
爾道の爲めに苦むも猶之を外にして
おほいなる寂滅を見よ(寂滅爾の意に適はゞ)。
爾專ら再びのぼるべき天上界に賴りて
そゝに爾の一片の塵骸を捨てよ。
あゝ天より流竄せられしもの
手を故園の星辰界にのべよ、
爾その曙の再びかしこにわくるを見よ、
爾おほいなる一切を見るおほいなる目となれ、
爾萬有の融化し終るかのおほいなる神秘を思へ、
うまるゝ、生ける、進める、亡べる、崩るゝ、
一切の人類、一切の墳塋を思へ』と。
さはれ我心常に痛む、其痛むほとり常に同じ。

蒼天暗夜永劫遂に
一の靈を亂し一の塵を靜むるゝと能はず。
天上穹窿の莊嚴の光
以て涕を乾かすに足れりや。
あゝ天地は荒涼の墳墓、すみわたる夕、夢むる森、
やさしき月をわれに且示し且說くぞよき、
我はしづかに之を聞きてしづかにやさしき眠に入らなん。

七

あゝ花を、あゝ花をわれ集め得ましかば、
われかの二の冷めたき床に百合の花を集め得ましかば、
われ花をもてわが青白き天使を蓋ひ得ましかば。
花は金なり碧玉なり黃玉なり瑪瑙なり、
花のたゞなかにゝゝ棺は埋まるをねがはめ、
花は死者を愛す、神は其根をして





骨に觸れ其香をして靈に觸れしむ。
我かれを愛せしも今之をよくせざれば——
われのあなたに再び行くを神いま許したまはざれば——
冷めたき運命彼我に迫りて父は悲み子は眠り
追寫われを苦めて墳塋彼をおほひぬれば——
今は一片の草葉をもわれ彼の無聲の墓に投ぐるを得ざれば——
されば彼女少くも我靈を得んゝと善からずや。
あゝわが屋上に叫ぶさびしき風よ、
あらしよ冬よ其雹もて我瓶を打てるものよ、
海よ夜よ——われ彼の爲めに此書の中にわが靈を置きぬ。
此書を取りて而していへ『ゝはわが後に
殘りて夢むる生者より來ぬ』と。
魂よゝの書を取りて遠く隔つとも我聲を知れ。
あゝ爾の灰は我が息みの床なり、

爾の墓はわが望なり、わが愛なり、わが信なり、
爾の葬衣は常に生命とわれとの間にひらめく。
いざ此書を取りてあゝより神聖の歌頌をおさせ、
爾の暗き手の中に此書いかでまぼろしとなれ、
此書わが天使の眼に照されて
曙のごとく白うなりもけ、
吹く息にそだつ爐火の如く
夕に過ぎ行く光の如く
香爐の火花のあらしの如く
行きて流れて遠く跡なく
やがてすごくかゞやく爾の目の下に
書の幾丁星となりて皆暗中に去れよかし。

八

嗚呼人何を爲すも人何を語るも





其靈或は天馬の翼に飛ぶも
或は昆虫と等しく地上に這ふも、
微かにひかるゲッセマテよ、人は常に
人は常に爾のさびしき洞窟に到らむ。
あゝつらき怪しき悽愴の巖、
靈魂と運命との爭ふ處、
慘澹たる造化の幽淵の戸口、
欲情の獸近より臨みて震ふ處、
更にあやしきすさまじき「憂」の
悄然として髮を乱して入る處。
あゝ墜落よ、隱退よ、幽谷の門よ、
もく〳〵我生の窮まり盡くる處、
歳月の泥に印せる吾人の歩み止まる處、
禍ごとに重うして松柏のうれひ悲む處、

陰影陽光相まじりて天使の驚き震ふ處。

吾人はつねに此幽居に來り
さゝに思にたへず悄として曰はず。

あゝ逝ける者安かれよ、眠れ眠れ眠れ眠れ
しづかに形を替ふる渾沌無數の群、
眠れや野、眠れや花、眠れや墓、
眠れ人家の屋壁、墳塋の堆石、
眠れ林下落葉の堆、眠れ巣中羽毛の片、
眠れ眠れ草葉の微片、眠れおほいなる無窮の群、
しづまれあらもる樹木あらもる果草、
しづまれ悶に湧きたつ大洋の波
しづかに聲なき死者の沈黙





莊嚴神聖なる敬神の恐、皆悉く休へよ、
恐るべき疑、おほいなる不信の暗、
おそろしき沈默幽微のもの
自然、中心、周圍、內外、
一切の渾沌、上帝の幽獨、皆悉く靜かなれよ。
あゝ霧深き呼吸に走る塵界の民、
あゝ原上を走るものすゝき歩、しづまれよ。
眠れ爾泣くもの、眠れ爾疲つけるもの、
『憂』よ、『憂』よ、『憂』よ、爾の聖き眼を閉ざせ、
あらもるもの宗教なり、侮慢のもの一もあるとなし。
あらもる生物のうへ、あらもる受造のうへ
あらもる善惡禍福のうへ
やさしき、はげしき、うるはしき、いやしきすべての上
見よおほいなる天の平和の四方より降るを。

あゝ眠れる地獄は天堂を夢むるよ、
流よ海よ風よ魂よ皆おと〳〵く靜かなれ、
見よ今上帝の前山嶽の上
絶崖の側にたちて、星と人間と
天上の萬軍と暗空の彗星と
あらゆる渾沌とあらゆる万有との現はるゝを見るとおろ、
暗に眩し惑に醉ひ
無限の大空に天象の畫かるるを見て
傷み惱めるさはれ思澄める冥想の人
鋼鐵の壁上に人生の問題をしるし、
怪奇渾沌のたゞなかに曉を見んとして
震ひて茫洋の深崖にたち、
かけり飛び行く白鳥の目を追ひて、
惨として、光と色と曙とに伴はれて
烟霧うづなく幽谷のほのかに現はれいづるを見る。

（一千八百五十五年十一月二日ゲルンセイの鬻居に於て）

（註）一千八百四十三年二月十五日ユーゴーの長女レオポルディン其戀人シャルル、ヴァックケリイに嫁して平和幸福の生を送りしが同年九月四日過ちて夫妻共にセイン河に溺死しぬ、本篇中「爾等二人」等の句は此夫妻を指す也。

# 附錄

終

## 正誤

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
| --- | --- | --- | --- |
| 七 | 三 | 影絶にす | 影絶にず |
| 十九 | 三 | 自然の吐息。 | 自然の吐息たがためか。 |
| 二十五 | 九 | 叫ぶ | 叫ぶ。 |
| 二十七 | 十三 | 捨て | 捨てて |
| 五十五 | 十四 | 橄欖山の暗に | 橄欖山の夜半の暗に |
| 五十八 | 十二 | 凝らんとして | たほらんとして |
| 五十九 | | 『行て…』及び『神人…』の間行わかず | |
| 六十三 | 四 | 俗僧の悟らざる | …悟らざる、 |
| 同 | 五 | 宗派の私せざる | …私せざる、 |
| 七十五 | 一 | さゝやぐ | さゝやく |
| 百七 | 八 | 我は悲き | 或は悲き |
| 同 | 十二 | 神は口授し口授しぬ | 神は口授しぬ |
| 百十八 | 二 | ——深淵の | 此深淵の |
| 百二十 | 十三 | 漬さる哉 | 浸さるゝを |


明治三十四年五月十五日印刷
明治三十四年五月二十日發行

定價金四拾錢



著作權所有



著作者　土井林吉
仙臺市大町三丁目廿五番地

發行者　佐藤養治
仙臺市名掛丁五番地

發行者　山本音四郎
仙臺市新傳馬町六番地

印刷者　佐伯要治
仙臺市南町十二番地

印刷所　千葉活版所
仙臺市南町十二番地

發兌元
有千閣
仙臺市新傳馬町六番地
佐養書店
仙臺市名掛丁五番地

# 特約大賣捌所

| | | |
|---|---|---|
| 東京神田區表神保町 | 東京堂 | |
| 仝　仝　裏神保町 | 上田屋 | |
| 仝　京橋區南傳馬町二丁目 | 目黑甚七 | |
| 仝　日本橋區通一丁目 | 大倉書店 | |
| 仝　仝　橋町一丁目 | 大草常章 | |
| 仝　神田區雉子町 | 岡崎屋書店 | |
| 仝　仝　美土代町 | 文陽堂書店 | |
| 大坂南區安堂寺町四丁目 | 田中太右工門 | |
| 仝　東區安土町四丁目 | 積善舘本店 | |
| 仝　東區備後町四丁目 | 吉岡平助 | |
| 仝　東區北久太郎町四丁目 | 岡本仙助 | |
| 仝　東區南本町心齋橋通り | 金尾文淵堂 | |

# 廣告

土井晩翠著

## 天地有情

### 本書に對する重なる批評

今の時に當り、多少の興味を以て、『天地有情』の題名を讀み得るもの果して幾人ありや。詩の侮りを受くるや極まれり。吾人晩翠の詩を讀みて、先づ其不遇を悲まざるを得ず。

『天地有情』の一卷は、まことに妙たる一小冊子也、裝釘の美の見るべきものあるに非ず、其價亦僅に廿五錢のみ、而かも吾人はそが我文學界に於ける近年稀有の好出版なるを疑はず。

晩翠の詩は、藤村の作と並び稱せられて、夙に批評家の筆に上れり。我が幼稚なる詩壇に、新たなる光と命とを齎したる彼れが使命の普ねく認めらるゝ氣運は、漸く近き來れるが如し、是れ吾人の深く晩翠の爲に欣ぶ所也。然れども吾人の見る所を以てすれば、彼れの詩の眞價は、尙ほ未だ今の人に了解せられざる也。吾人久しく晩翠を知る、彼れが詩人としての性情に參して其詩を解すれば、世上批評家の言ふ所とおのづから別種の趣あるを見る。想ふに彼に就いて一言するは、吾人が當然の務めに非ざるべき乎。

吾人の第一に彼に就いて言ふべきおとは、彼の詩の極めて眞率なるおと也。彼は格調に就いて苦心せしなるべし。如何にして七五調の單調を免れ得む乎、てふ問題は、彼れが他の新体詩家と共に、少からざる工夫を施せし所なるべし。彼れが連りに漢詩調を用ひて、柔弱平板なる和歌調に雄健急促の發聲を與へむと試みたるは、即ち是工夫の結果に外ならざるべし。吾人は『友高樓のおばしま』と云ひ、『露荒涼の城あと』と云ふ』が如き造語が、幾何の成功を齎しゝかを知らずと雖も、兎に角、彼れが詩形の爲に盡したる苦心と工夫とは、最も明なる事實なりとす。然れども是の如きは彼にありては形式のみ、体裁のみ、彼の詩には別に形式以外の生命あり、体裁以上の精神とを發表せむと試みたり。是に於て乎彼の詩は即ち彼の哲學也、理想也、宗教也。

晩翠はユーゴーの崇拜者として知らる、而してユーゴーは。聖書ヵルギルタンラの愛讀者也。晩翠の詩が一種の宗教的、もしくは超絶的感情に富めるは、蓋し自然の勢ならしむか。彼にありては藝術の眞面目なるは、毫も人生と異なるなし。されば彼の詩は、遊戯の歌に

あらずして祈禱の響也、即興の感觸に非ずして永遠の思索也。此點に於ては、彼の詩はまさしくユーゴー、ダンテの流風也。

藝術の爲に藝術ありてふ主義は、ユーゴーの取らざる所也。彼の詩は一に人生の爲に存せり。而して彼の所謂人生は、理想の人生也、永遠の人生也。是理想永遠の人生に對して、進歩と、自由と、人道との福音を唱ふるもの、即ち彼の詩也。彼の詩は是故に哲學的なると共に宗教的也。飜て『天地有情』を繙いて、『萬有と詩人』、『夕の思ひ』、『浮世の戀』、『造化妙工』、『暮鐘』の諸篇を讀め、宛然としてユーゴー集中の還魂に非ずや。晩翠の特徴實に茲にあり、其短所も茲にあり。

夫れ已れの物に非ざれば、人に與ふる能はず。詩人の性癖は、我れ是を如何ともする無き也。晩翠のユーゴーに私淑する、素より妨げず、唯而かもユーゴーの感情思相を移して、直に是を本邦の今日に擬す、可ならむ乎。曰く、人世は永遠也。曰く、理想は我目的也、進歩は我主義也。曰く、自然は笑ひ、人間は泣く。ユーゴーが當代の佛蘭西國に齎したる、是の如き福音は、歴史上より見れば、畢竟一時代の精神のみ。今や世移り、人渝り、國異れり。新らしき日本の詩人にして、尚ほ是陳套を反覆す、恐らくは歴史を無視せるの嫌あるに非る乎。晩翠にして苟も國民的詩人たらむとする乎、永遠、理想、進歩と云ふが如きものゝ外、豈幾多の新精神、新思想の歌ふべきものの無からむや。

『自然は笑ひ、人は泣く』、是のユーゴーの套語は、亦同時に晩翠の套語也。彼れの詩の根底となれる人生觀は、何れも是套語に本ける厭世の感情ならざるは無し。

天の莊嚴地の美麗、
花かんばしく星照りて、
自然のたくみ替らねど、
わづらひ世々に絶にずして、
理想の夢の消もるまは、
たにずも響けとおしへに、
地頻天籟身に兼ぬる
もふ入相の鐘の聲。——「暮鐘」

是の種の厭世的感情は、東西古今に渉り、幾多の詩人に歌はれ、今も尚ほ大いなる慰藉を吾人に與へつゝあり。而かも潛に想ふに、二十世紀の曙光を迎へむとする現時代の詩人は、かゝる單純なる人生觀を以て、果して能く一世の人心を捕捉し得べしとする乎。即與直感を旨とする抒情詩、例へばバイヤが作の如きものにありては、則ち可なるべし、晩翠の如き思索的、將た冥想的傾向を有するものにありては、寧ろ幼稚の譏を免れずとせむや。シルレルは十八世紀末の冥想的詩人なり、而かも其人生觀は是の如く簡單なるものには非ざりき。是れ『理想と人生』、及び『理想』の諸篇を讀めるもの、知る所也。吾人をして忌憚無く言はしめば。自然及び人生に對する晩翠の觀念は、尚ほ幼稚也。恐らくは彼の哲學思想は、何等確實なる科學的研究の上に樹てられたるものに非ずして、ダンテ、ユーゴーの如き詩人の詩的想像に養はれたるものに過ぎざるなら む、是の如きは、十九世紀末の詩人が其人生觀を得たる方法としては、餘りに簡單なる方法に非るべき乎。見よ、テニゾンの如き保守的詩人すら、尚ほ一六十年後のロックスレー堂』に於て、近世的知識を調攝する必要を認めしに非ずや。言ふまでも無く、詩は時代に適應して初めて盛なり得べし、人文の進歩に隨て常に新しき理想を捕捉し、時代の精神に對して常に新しき解釋を與ふるに非ざれば、決して當代人心の需要と感情を滿足せしむる事能はざる也。吾人は吳々も晩翠が是點に就いて三省せむことを望む。

晩翠の他の特性として最も著しきは、そが冥想的傾向に富めるの一事也。『天地有情』收むる所、如何なる短篇と雖も、多少の冥想を含まざるもの無し。是點に於ては、彼は甚だシルレルに近きもの也。冥想的なるが故に隨て思索的也、隨て即與直感の抒情詩は、彼に於て絶て見ざる所也。彼れの詩は飽迄意識的なり、自覺的也、不用意の間に天眞を流露して、自然の妙境に詣るが如きは、彼に於て望む能はざる也。彼れの詩の多くは、抒情詩也、然れども『ゲーテ、バイ子、シエレーの即與抒情詩にあらずして、シルレル、スヰンバーンの冥想的抒情詩也。夫れ唯冥想的也、是を以て托意の高は則ち是あり、思索の幽は則ち是あり、而かも往々自然に遠かり、人情に離るゝの弊を免れず、加ふるに朦朧難解の弊に陷るおとあるは甚だ惜むべきに似たり。彼は未だ嘗て叙事詩を作らず、『五丈原』の如きも、人往々目するに叙事詩を以てすと雖も、實は一種の抒情詩のみ。

然れども『天地有情』は、晩翠にとりては例てば試毫に過ぎざるのみ。彼れ年齒尚ほ壯、才藻氣暢、共に望を後年に屬するに足る。彼は大學に入りて英文學を修め、傍ら獨佛、伊の諸語に通じ、東西の文學多々渉獵せざる所無し。而して學を術はず、名を求めず、靜に古人を友として吟哦に耽る、是を近時の英文學者が、リードルの教師を以て自ら安ずるに比して、眞に敬服するに足るものあり。吾人は彼が自己の使命を自覺して、なほ〳〵奮勵せむおとを希はざるべからず。知らず、彼は吾人の言に首肯するや否や。

（太陽第五卷第十四號）

（上）

嫌いなるもの、伊藤博文、壯士役者、新体詩、年増の酸漿ならしたる、と或人は言へり。予も亦新体詩を好まざる一人也　然れども予は不食嫌の譏をを免れんが爲め、此頃大々詩人の評判ある晩翠子の『天地有情』といふを讀みたり。

劈頭第一のまづさ哉。

沖の汐風吹きあれて　（平凡）
白波いたくはゆる時　（拙劣）
夕月波にしづむとき　（平凡）
黑暗よもを襲ふとき　（拙劣）
空のあなたに我舟を　（弛緩）
導く星の光　あり　（無力）

造句法大率此の如し。内容の思想には稍新とすべく高とすべきものありと雖も、終に詩を成さゞる也。さはいへ、時に佳句なきにあらず。

み空の花を星といひ
我世の星を花といふ。　（星と花）

光はとはに若うして
世は斯までに老いし哉　（夕の星）

黑ぞめおろも稚長く
「暗」の歩みに音もなし　（暗と眠）

清き乙女のむくろより
なぞか菫の咲かざらん　（造化妙工）

露のしづくに光あり
しづくの露に心あり　（靜夜吟）

是等の佳句好想も、平凡拙劣にして弛緩無力なる他の多數の句に擁せられては、其光を發するあと甚だ難し、作者が得意なるべき長篇の如きは、殆んど人をして讀むに堪へざらしむ。予は勉強して之を讀了したれども、終に十分に其意を解せず、終に何等の感をも生せざりき。『星落秋風五丈原』の如きは凄しき評判を聞き居たれど、予は取りあげて之を評するを欲せざる也。

（三十二年七月廿九日萬朝報　枯川）

（下）

予は今、全篇通讀の際、朱を施しおきたる字句を摘んで左に示す。新体詩初學者の指南たるべしと思ひてなり。

「星」といふ字　大凡五十

星は天の穴なり、星に依らずんば天の神秘を窺ふあと能はず。詩人若し星といふ字一百を用ひ得ば以て大々家たるべし。

六

「いさゝ川」

嗚呼いさゝ川、何ぞ其韵の美なる、詩人は此の如き語を撰んで多く之を用ひざる可らず。又川に配するには、



必ず野薔薇を以てせざる可からず。例へば左の如し。

野薔薇散り浮くいさゝ川
夕暮淋しいさゝ川

夕涼しき廣瀨川
野薔薇の薫り消失せて

「ぞや」「なに」「よ」などは尤も厭味なき語なり。多ければ多きほど弗よ厭味ならず。例へば左の如し。

誰が高樓の眺ぞや
飛行くはてはいづくぞや
花誰が爲めの薫りぞや
かゆるいくその景色ぞや

色ある花の聲や何に
消によ光の甲斐や何に

あらし叫びぬ「惱よ」と
萎みはてんか「あゝ花よ」
星は語りぬ「あゝ花よ」

入日を歌ふには必ず「思入日」といふべし。さなくては詩と稱するに足らず。例へば

思入日を先きだて、
思入日に啼く鹿の

あらしは孕むといふべく、あけぼのは白しといふべし。例へば

あらしを孕み風を帶び
あらしを孕む黑雲に

されば曙雲白く
曙白く雲われて

總て是等の句、一たび用ひたるのみにては殘りをしき心地す。又折角の名句を人の見おとされん恐あり。必ず一冊の書中に二三個以上は用ひおく心がけ肝要なり。又漢詩反譯の例を示せば左の如し。一將功成万骨枯といふ拙劣なる句も、晩翠子の手に譯せらるれば忽ちに名句となる

民のもゝちの骨枯れて
ひとりのいさを成ると聞く

又語數の都合により「を」の字「は」の字等を加減する法左の如し。

時をも忘れ身も忘れ
流はもるし水清し
烟は沈み水むせぶ

又「星移物替」といふ漢語を用ひんとする場合の如き、其儘にては調を爲さず、故に「皆」といふ字を加へ「星皆移り物替り」とすれば非常の好句を成す。是等の場合、皆といふ字の必要あるにあらず。只語數の都合により隨意に增減するあと猶「を」の字「は」の字の如しと心得べし。用字用語此の如く自在にして、始めて以て

## 新体詩の大々家と稱すべき也。

（八月一日萬朝報　枯川）

晩翠と藤村とは現代に於て確かに詩人の名を値する二作家なり。藤村既に若菜集一葉舟及夏草の著ありて晩翠未だ一詩集なく、讀書界をして空しく其詩集の上梓を待たしめしこと久しかりき。天地有情是に於てか出でぬ。藏むる所長短合して四十篇、卷末には附錄として「カーライル」「シェレー」「ジョージ、サン」「エマーソン」「ユーゴー」諸名家の詩論を抄譯せり。

集中の作概ね嘗て我が帝國文學及び反省雜誌に出たるもの。既に幾多の評家が品騰を經て、世はゞ定評ある如しと雖、今其詩集の上梓に際して少しく評論を試み、吾人が晩翠に對する所見を述へて之を著者と世人とに問ふ、また可ならずや。

吾人いま其詩編を評せん前、先づ著者晩翠子が詩に對する見解を窺はん。何となれば藝術の作家が其藝術に關して抱ける意見は、作品の上に少からぬ效果を生ずるものなればなり。

晩翠子は其自序に云へるか如く、詩は閑人の囈語に非ず彫虫篆刻の末技に非ずとなす。彼の櫻かざして舞ひにけん我か王朝の大宮人が、朝の花の香をめでゝ、夕の月にあくがれて、散るを悲み曇るをなげき、只一塲の眺嘆を三十一文字に寄せて、ひたすらに風調の巧をきはひ、殆んと無意義の語を弄せしか如きは決して子が作詩の目的に非ず。晩翠子は詩を以て國民の精髓となし、人心最奥の所より發する叫となす。故にカーライルと共に「詩人は預言者に同じく、天地の神秘に徹底せんとするもの」と考へ、シェレーに同じく「詩は推理計算の達し得ざる永劫界より光と熱とを齎すもの」と考ふるに似たり。詩人たらんものは美術家と哲學者とを兼ね（ジョージ、サン）日常觸目の事物中に神秘の意を觀す（エマーソン）べしとは、恐くは子が作詩の要諦たらん。洵に子は「或は人を天上に揚げ或は天を此土に下す」ごと是れ詩の理想なりと明言せり。此の如きは啻に吾人が晩翠の自序と、卷末の抄譯とにより推測揣摩せる所なるのみならず、其詩篇より歸納し得たる所なり。煩を厭うて詩篇中より引證するを爲さゞと雖、若し疑はゞ之を「詩人」「万有と詩人」其他の作に問へ。晩翠が詩の特色は一に其詩に對する見解より來る。其長所實に此にあり、短所も亦此にあり。晩翠子既に如上の見解を持す。故に天地人圜到る所に或る意義を探らんとす、神秘の色を窺はんとす、重んずる所想にあり。自然の景物を描いても必ずや只之を寫すに止らず。其後景に或る偉大なるものを伏せしめんとす。願ふ所は意詩の高遠幽玄にあり、理想を追ふにあり。同じ樹頭の春の花も水底の秋の月、歌人俳客なりせば只あはれと詠め、美しとめでゝ止まん。晩翠子は則ち然らず、佛者と共に這裡に上求菩提の機を求め、下化衆生の相を認めしとするなり。口なき野路の花に涙に餘る思を聞き、聲なき荒磯かげのうつせ貝に海のしらへを心ねを聽かんとするなり。子は詩人を以て美術家と哲學者とを兼ぬべしと考ふるが故に、人生の悲慘を叙するにも、鎖魂斷腸の事を描き、其傷心煩悶の人と共になき、之と共に狂せんとはせで、榮華のうつろひ易きを叙し浮世の濤の荒きを語り、悲むべき人間の運命を嘆せんとす。されは其詩自ら冷靜の調を帶ぶ。ともすれは評家か晩翠の詩情熱の乏しと云ふはあれが爲なり。情熱に乏しと云ふは可なり。絶にて血なく涙なしと迄評するに至て、吾人はたゞ其評家の沒不曉を笑はんのみ。涙とは只後朝の袖、別離の袂にのみ宿るべきものならず。悲哀にも涙あれど悲壯にも亦涙あり。鐵甲よろふ武士の見かけはつらき鬼あざみ、綾れば露の一雫、涙の數は少なくとも胸裏萬斛の暗涙あらむ。詩人が彩管を揮うて彼を叙し情極らんとき吾人は之を涙あり血ありとせむ、此を寫し來ておもひ切なる時、吾人は之を評して血あり涙ありとは云ふ能はざるか。げにや晩翠はうれしき心勞の悼ましき苦痛に變らんとするを嘆きて、世の險艱になきむせぶ可憐の少女が憂愁を寫し、之と共に悲泣せん情熱はなからん。然れども晩翠の詩また一種の狂熱あり。天には光地には暗、苦と望との間に悶もる人間の運命が悲慘なるを見、榮枯盛衰一塲の夢に似たるを悲んでは絶叫神に問はんとす。吾人は評して冷靜の調ありと云ふのみ。冷靜の調何ぞ情熱の皆無を意味せん。

天地有情一春四十篇、或は聲調を以て勝れるあり、或は着想の清新、題案の奇拔を以て優るあり、或は片言隻句無限の詩趣あるあり。「夕の思ひ」「光」「萬有と詩人」及び「馬前の夢」「星落秋風五丈原」の二長篇、皆ふれ吾人が吟誦幾番倦むを知らざるもの何れをそれと定め易からずと雖、斷して「暮鐘」をもて全篇の白眉と推さむ。短篇に在ては「星と花」最も妙「雪上の花」之に次ぐ。

望の光を見せて輝く天上の星、愛の色を示して地上の花。共にふれ幾多の詩人をして錦鵬を絞らしめし美の化身。晩翠子歌うて云ふ。

同じ「自然」のおん母の
御手にそだちし姉と妹
み空の花を星といひ
わが世の星を花といふ。

かれとあれとに隔たれど
にほひは同じ星と花
笑みと光を宵々に
かはしもやさしき花と星。

されば曙雲しろく
み空の花のしぼむとき
見よしら露の一しづく
わが世の星に涙あり。

末節特に輕妙、全篇の詩趣爲に動く。

夕をしらぬ蜉蝣の命、露のひぬ間の花の色香をあはれはかなしと悲めど、人生却て朝露に似たり。富貴貧賤遂に何物ぞや、金冠戴く帝王も、伏屋にわぶる賤の子も、何れは同じ北邙一片の煙、墓表青苔むして寒烟空しく鎖す所、野花一基獨り色に傲る、何等悲痛の對照ぞ。晩翠氏此好題目を捉へ來りて才華「墓上の花」と開く。

死と悲みと恨との
跡を留むる墓の上
美と喜びと命との
あゝわたつみの波の花
銀蛇のとぶに似たるかな
仰げば空に虹高かし
虹にもよはぬわがあゝろ
波にもにぶきわがあゝろ
たのむはひとり君が歌

まことの光まことの美
さ霧に蔽はれとざゝれて
暗にさまよえ我が心
たのむは獨きみが歌

「萬有と詩人」の一篇よく晩翠氏が詩人としての技倆を示して餘あり。あしたの風、夕への雲、流光、星華のさやしきより、猛獸の吼山谷を動す所、鷲の翼の嵐にたわむ所、狂風熱塵を捲て枯骨空に碎くる大砂漠、黑雲白日を呑んで火焰天に冲する大火山の慘凄に至るまで、其彩毫に上ては悉くあれ好詩境。「嵐の中に樂をきゝ、荒野の中に花を見る」詩人の眼あらしめば天地何物か詩材たらざらん。一篇の詩すべて詩人の謳歌なり、如何に晩翠が詩を貴び詩人を愛するか之を左の二節に見よ。

あゝわたつみの波の花
銀蛇のとぶに似たるかな
仰げば空に虹高かし
虹にもよはぬわがあゝろ
波にもにぶきわがあゝろ
たのむはひとり君が歌

まことの光まことの美
さ霧に蔽はれとざゝれて
暗にさまよえ我が心
たのむは獨きみが歌

紫蘭のかほる百合花の色
爲めにさかなん君が歌

「馬前の夢」及「星落秋風五丈原」の二篇共に材を史に取りしもの、而して「馬前の夢」は反省雜誌夏季附錄に出て、當時好評嘖々たりき。「名は一代の史をまとめ身は金歐の權を統べ」たる蓋世の英雄も、「不能」の文字は笑ひしが彼亦遂に神ならず「玉樓の春短くて、魚龍淋しき秋の水、花はうらがれ香消に、ほまれの星も落行けば、壯圖碎けて力盡きて、孤島のあらしすさぶとき、今はの床にあるナポレオンを歌ひしもの即馬前の夢なり。構想雄大、特に篇頭嵐を寫す處、其鴻業を叙する所、筆想に台ひ聲調勁拔、比喩暗喩等古の文飾を使ふ巧なり。只地名等の挿入多く爲に調を害せし所あるを恨むのみ。其好評に背かず。然れ共疑ふ晩翠氏自ら喜ぶ所は「悟りよいつれ運命の」以下の數節には非ざるかを。「星落秋風五丈原」は卷中最長の篇、吾人之を細評せむ遑なし。漢語を用ゐると他の諸作に過ぐ。故に或は聲調にわづらいなきに非ざれ共、概して巧に用ゐたなせしとおろ、晩翠にして初めて能くせむのみ。第二段特に詩才を見る。小節のわきて巧妙なるものに至ては極めて多し。第五段亦晩翠子得意の筆。さもあらばわれ叙述の妙、聲調の美以外、なほ想に於て晩翠子が特得の妙は之を第六段に認む。

「暮鐘」の篇に至ては着想高潔、意義深遠、聲調流麗、全篇の白眉、集中の絶唱なり。嘗て我帝國文學に載せたるもの。今更らに再び掲ぐるを須ゐず。

「夕の思」及び「光」の二篇は晩翠氏の人間に對する感想、云はゞ人生觀をおぼろげながら吾人に示すが如し。今試に之を窺はん。

返照漸く收まり流紅うすれ行く所、浮雲幾團白在の翼のして落日の影を追ふ、知らず何處に行かんとする。

あゝ夕雲のかけり行く
空のあなたぞなつかしき
心の渴とゞむべき
そゝに生命の川あらむ
眞理のかぎを開くべき
そゝに秘密の鍵あらむ。

願はくは身を夕雲にかつなして、「浮世の暗に知られざる光」の跡を尋ねなん。願ふゝゝろは切ながら、遂にゝれ地上の人。「星より星に光をと飛もく魂を眺め」しは詩人が想像の幻に過ぎず想像は常に天上の光にあくがれて、消にしエデンの花園のおもわは今に忘れぬゞ、なまじひ知惠の果物を求めしより、忽ち陷つる「涙の谷」頭を回はして人園を見る、運命何ぞ悲慘なる。母の乳房にもたれつゝ

宿すもゝかし春の夢
見なば魔王もゑみぬべき
稚子の眠も一ときや
やがて寄せゝん世の嵐
つらきあらしのすさむらん。

無心の稚子何の罪ぞ。浮世のあらし何の無情ぞ。

つらきあらしを譬ふれば
陰府なる門の、かも
脆き弱きを贊として
いけるをきほふ世々の聲
うちに恨の叫あり
うちに憂の涙あり

ゝの悲むべき我世のうち、何國何代爭亂のあらざりける。一身の榮を求めて罪なき人の血を流し。一時功成り萬骨枯る。此の如くして集め得たる榮華亦泡沫に似たり。

世界の富を集めたる
ローマの榮華夢ときに
ゝがね鏤ばめ玉しきし
ニ子ブ、バビロン野とゝあれて



砂上につきしバベル塔
今はた何を殘すらん。

嗚呼地上何れの處にか望ある樂ある。

荒れのみまさる人の世に
せめては匂ふ戀のはな。

夫れだに命もろうして。

星の眸月のまも
たゞ思ひでの種として
いづく消に行くまぼろしぞ。

詩人の涙とゝしなへに涸るゝの期なし。まゝと人間は「死と疑の子」となりて、理想は終に消につるか。しらず人は苦まひが爲に生れしか。

波に照れとて空の月
花に舞へとて春の蝶
「自然」のわざは妙なから
世に苦めと塵の身を
暗に迷へと玉の緒を
つくる心の知りがたや
かゞやく星に空かざり
玉しく露に地をよそふ
神に尋ねん如何なれば
なまじの絆人の子の
心にちゑの願あり
胸に悟の望ある

絶叫天に問へ共天答へず。悲觀するが是か、せざるが非か。

憐むべし人間只此間に迷ふ。

天には光地には暗
あひにさまよふ我思ひ
浮世の憂を吹よせて
あわく叫ひぬ「惱よ」と
神の光榮をほのみせて
星さゝやきぬ「望よ」と。（以上「夕の思」より）

惱か望か苦か樂か「ひたすらに我が世つらしと見もれども」花香ばしく星照りて」自然の美をば棄て難し。

人にくしき想像の力あり。

そのおほ空のたゞ中に
我か想像の見るとゝあろ
緣はきにて金色の
光まばゆし天の闕

もゝの實を鏤めて
錦なす門　を過ぎ行けば。
空かんばしく花降りて
行く大水の音のおと
響くは天の戀のうた
流るゝ霞くれなゐの
春とあしたに若うして
風は優鉢羅の花の香か。

嗚呼美はしのまぼろしよ
現實のあらしつらければ
かさしの花の露の古と
脆く碎けて跡ぞなき
今我がかへる人の世に
夢はむなしきものなりき。

あゝの光に暗まじり
あゝのうま酒濃にがし
あゝなる戀に恨あり
あゝなる歌に涙あり
自然は常にほゝゑめど
世は長への春ならず

花は光に鳥は香に
いざよふ雲は夕づゝに
そよふく風は朝波に
替はすは戀のあとの葉か
自然は常にほゝゑめど
世は長への春ならず。

人間の智巧賤むべく、自然の美親むべし。人に想像の力あり、自然の美を享樂してあゝに樂土のまぼろしを描く。描くと雖現實の嵐つらうして夢忽ち消ゆ。夢消えて後自然の美なほ舊に依る。爰にまぼろし復更らに成らん。嗚呼樂土竟に實となるなくんば、星花何の爲にか存する。

もゝとせ千歳秋去らば
樂土は實となるべしや
人と人との爭に



我世の懸絶にさらば
花たが爲のかはりぞや
月たが爲の光ぞや。

弱きもろきを虐ぐる
あらびを見るもいつまでか
悟の光暗うして
時の徵候はわかねども
望め我が友いつまでか
「力」は「正」に逆ふべき。

愛と自由と平等の
まゐとの光かゞやきて
天の王國來るとき
鳴呼其時をまちわぶる
友よもろとも手を引きて
薄暗の世をたどらまし。（以上「光」より）

樂土豈遂に來らざらんや。其天の王國の來らむまでは、暫く想像の力にたより、詩人のまぼろしをかりて、時に或は身を天上に置き、時に或は天を下界に夢み、薄暗の世をたどらんかな。晩翠子の人生を見る夫れ此の如し。此思想は我が古來の思想に非ずして子が歐西文學の研鑽により得來りしものなるや明なり。あながちに此世を穢土視する小乘佛教的衰觀に非ず、またひたふるに我世たのしとする淺薄なる樂觀に非ず、自然は常にほゝゑめど、世は常への春ならず、人園の運命實に悲慘に充つ。然れ共終には理想的樂土を現出し來るならん、其終局の曉までは吾人の行路は薄暗の如しと雖心に一點の希望あり、天の一方に光明を認めて徐ろに人生の路をたどれとなり、科論にて云はゞ新化論（エヴォルーションオフリリス）的樂觀（オプチミズム）なり。ほゝゑむ自然の美を享樂して想像の力により理想的天國を造て、苦に惱める同類に教へ、之をして文學の賞玩により一時たりとも現實の苦境を脱して此樂土に逍遙せしめ、彼の希望をときかの光を教へて人生の指導者たらんと實に詩人の任なり天職なりと考ふと見るはひが目か。吾人が晩翠の對詩歌見と云ひしもの皆此思想より派繹され得べし。晩翠の作を通じて此思想は認めらるゝ故に義理の高遠あり、光明あり希望あり、沈痛あり理想的あり、又我が詩壇にて云はゞ思想斬新なり是を吾人の見たる長所となす。前に掲げし詩篇の節にも見もる如く、晩翠は我世の戀に

は恨ありとなすが爲か、あらぬか、彼は戀を歌ふと稀なり、歌へは則ち戀のたのみ難き變り易きものなるを述ぶるのみ。題を「浮世の戀」と設くるに至ては其意知るべきなり。さは云へど「無題」「哀歌」の二篇、子が戀の歌として珍とせず。知らず、浮世の人に代りて歌ひしか、將た子が日からの心なるかを。吾人は決して當時の新脉詩人甚しきは少年雜誌のおぼつちやん詩人まで、明けても晩れても戀とか涙とかならべたつるが如き二束三文のあひ歌を好まず。あらず。此の如きものに對すれば嘔吐を催さんとす。然れ共眞の戀はおゝ實に人間の眞情暴露する所、古來幾多の詩人、是を描きて其詩人の名を受けしものあるに非ずや、是等の事は歐西文學の素養深き晩翠子豈に吾人の言を俟て知らむや。然り子自ら「あれのみまさる人の世に、せめては匂ふ戀の花」と歌ひたるに非ずや　而も自ら戀を歌はざるものは、或は文壇の現勢に顧み若しは他の理由ありて故らに之を歌はざるならん。よし。あれ晩翠子に害なきなり。然はれ戀の範圍は極めて廣く尋常の詩人皆材を茲處に取り來る。而るに之を棄て去らば子が彩毫と雖之を揮はん餘地をせばむるの恐なきか。願はくば吾人の婆心杞憂たれ。晩翠子の詩皆前陳の思想により一貫せらる、されば皆理義の高尚なるものあると共に、動もすれば一律に陷るなきを保せず。馬前の夢、五丈原二篇何ぞ結尾の同樣なるや。吾人をして腹藏なく述べしめよ、晩翠の詩の弊は描かずして說らんとするにあるか、子が作詩の要諦とし、詩人の天職とするところの。各詩篇に見るは吾人先きに其長所とし、之により各篇に高遠の義、希望光明の著きを讀したり。然れ共若し描くを主とし、詩的構想により千萬の境を變へ、物を變へて之に想を寓するに非んば恐くは單調に終らむか。又子は時として日常觸目の事物中にも神秘の意を觀んとするか爲め、描きて情に訴へて自ら讀む者に感せしめず自ら說明する底の失あり、換言すれば情に訴へずして智に訴ふるとあり、從て抽象的の語多きを占むるに至るとあり。是を吾人が見たる缺點とす。序なれば云はん、子は頗る措字の上にも苦心せる如く、詩集上梓の際には各詩篇其前に現はれし時よりは多く攻竄推敲を經たり。只惜む攻竄を經て却て妙味を失ひたるものなきに非ざるを。詩人の篇に於て吾人特に此感あり。さもあらばあれ其叙事巧妙にして着想高遠、才華燦爛、詩趣汪溢。錯字豪放にして漢語を厭はず洋語を問はず、縱橫混へ用ゐて而かも聲調流麗。筆物に隨て化し境に應じて變じ、或は迫潤を描き、或は雷霆を驅る。其詩人として技倆優に僧輩を壓す。新脉詩壇の驍將たるは世既に定說あり。吾人の呶々晩翠





流れ清き鐵の川の岸邊に逍遙して、雲雀の聲を聞き、疲れて土手の芝生に臥し、水に臨みて天地有情を誦す。まのあたり晩翠に逢ふ心地し、又何來の詩神、我に語るが如き心地す。余の識れる人の中にては晩翠は最も眞摯に、最も誠意に、最も俗臭なきもの、一人也。今や千里雲隔て、相逢ふに由なし。天地有情一部は、余をして直ちに晩翠に逢ふの感あらしむ。天地有情は晩翠の處女作也。其詩想の一本調子なる、其用語の妥帖を缺ける、又其の難澁の弊に陷れる處あるなど、欠点少しとせざれども、余は尤も其詞に意に沈潛として調高きを愛して措かず。太陽に於ける高山子の評は、流石に十年の故友の事とて、奇警なる眼孔なしとせず、晩翠は必ずや首肯する点あるべし、われ是迄晩翠の詩を紹介し、批評せし事、己に數回に及べり。今晩翠の詩名、天下に高きに及びて、また何ぞ蛇足を添へんや。晩翠の詩は厭世の聲よりも、寧ろ懷疑の聲なり。全く厭世とならば、竟に詩なきに至らむ。嗚呼、晩翠、塵の世に生れて、天上を戀ひ、古今を俯仰し、萬有を睥睨して悄悅煩悶の情を言の葉に寄す。浮世の戀や、功名や、毫も意を着せずして、唯うき世の果敢なきに泣き、思ひを天上の雲に馳す。其情何ぞ眞摯にして可憐なるや。塵の都を出で、山に入れど、おゝも亦浮世なり。嗚呼宇宙間に神ある乎。もし神ある者とすれば、神は極めて無慈悲也、殘酷也、冷やかなる者也。神まさに情ある者ならば、何故に人の子に智惠と云ふものを授け玉ひしぞ。智を絕てよとは、老子が二千年前の寢言に非ず、實に厭世の極に達せる痛切の聲なり。生存競爭の結果を冷やかに觀察すれば、それ迄なれども、涙ある人を如何せむ、智あるが故に自ら苦しみ、又人を苦しむ。浮世の罪惡、耻辱、苦悶、嗔叱は、みな智より生ず。人は私欲の動物也。智よく外面を塗抹して、益厭嫌の念を起さしむ。教育や、文物や、あれ詐を逐ぐるの具なり。人、人を殺し、國、國と戰ふ、浮世は修羅の巷にして、惡鬼長に陸梁す。尾生の信、宋

襄の仁、空しく世に喇けらる。聖人と仰がるゝ堯舜、何ぞ知らむ、おれ大山師の極なるを。かく人智愈よ進みて、人事愈よ非也。陳腐と云ふ勿れ、詩人の絶叫する社會は、今も昔も其境遇同じければ也。人は浮世の功名戀愛の花に醉生夢死す。山は語らず。水空しく流る。寂寞たる人間、晩翠ならずして、誰れと共にか此心事を語らむ。敢て批評と云はず、唯天地有情を讀み去て、平生懷ふ所を記す。大方の君子の後に喇笑するを辞せざる也。（文藝倶樂部　大町桂月）

發兌元　博文館
東京市日本橋區本町三丁目